慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	河仙鄭氏の文学活動,特に河仙十詠に就て
Sub Title	On the literary works of the Mac, Governor of Ha-tien, with special reference to the Ha-tien Thap-vinh
Author	陳, 荊和(Chen, Ching-Ho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.149(311)- 211(373)
JaLC DOI	
Abstract	A remarkable feature in the history of overseas Chinese in the Southeast Asian areas from the latter half of the 17th century to the latter half of the 18th century was the existence in the areas of political powers maintained and governed by local Chinese leaders or people of Chinese descent. Of these the author noticed that Ha-tien's Mac Thien-tu, Siam's Cheng Chau (Phya Tak Sin), Songkhla's Wu Yang and Lo Feng-pe of Pontianak (Borneo) were contemporaries who were respectively supported by groups of their fellow native tribesmen o,f the Cantonese, Teochiu, Hokkien and Hakka tribes. Among "these powers, the Mac of Ha-tien and the Wu of Songkhla were typical of the agricultural emigrant group; there was a close resemblance between them either in their basic character or in the form of their autonomous governments with power bestowed by the local ruling dynasty. But while the descendants of Wu Yang Were succeeding the hereditary Viceroyship of Songkhla and were being rapidly Siamized, the Mac of Ha-tien were never assimilated by the Vietnamese. As a matter of fact, Ha-tien played the role of a kind of buffer state between Siam and Quang-nam (South Vietnam), while maintaining the traditional Chinese moral and cultural conceptions for nearly 80 years. The author is of the opinion that the exodus of Chinese refugees to Vietnam in the latter half of the 17th century was chiefly due to their reluctance to accept the rule of the Manchus conquerors whom they regarded as barbarians. To be more concrete, they were resentful against the imperial decree of 1645 on "Changing the costume and shaving the head". Concequently they left their home to the south with a 'view of seeking a place where they could continue to maintain their traditional culture and way of lief. No doubt, the establishment of a Chinese colony at Ha-tien was based on such a strong feeling for preserving the Chinese tradition. The author quotes the paragraph on Kang-k'ou 港口 (Ha-tien) from the Wen-hsien T'ung-k'ao of the Ch'ing dynasty to illustrate the concrete social conditions of Ha-tien. The author also mentions the construction of Confucian Temple and free public school by Mac Thien-tu who was enthusiastic in encouraging cultural, educational and literary activities. Mac Thien-tu was himself an eminent poet of his age. He wrote excellent poems both in Chinese and in Vietnamese. The author comes to relate the process of the compilation of the work Ha-tien Thap-vinh 河仙十詠, a collection of poems admiring the ten scenic spots in Ha-tien, written by Mac Thien-tu and 31 of his Chinese and Vietnamese friends who used to exchange their poetic works with each other. The background of these poets and their relations with Mac Thin-tu have also been dealt with in the thesis. After having referred to a number of materials, the author has discovered that Ha-tien Thap-vinh and Minh-bot Di-ngu tap 明渤遺漁集 which used to have been believed to be the same collection of poems with two different titles, are two completly different works. The latter was solely written by Mac Thien-tu himself on the topic of " Fishing by the Sea-Perch Creek" 鱸渓閒釣. The part of its text which has been preserved to this day is included in the thesis. Finally, the whole text of the Ha-tien Thap-vinh is supplied by the author as appendix to this thesis.
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

河仙鄭氏の文学活動、特に河仙十詠に就て

陳　荊　和

一、十七、八世紀印度支那華僑史の趨勢と河仙
二、中国文化及び伝統の継承者としての河仙
三、河仙十詠の撰成と明渤遺漁集
附録　河仙十詠

一、十七、八世紀印度支那華僑史の趨勢と河仙

明末から清初にかけて、中国本土に於ける政治的動乱により、東南アジア地区に多数の中国人が進出し、活躍したが、その数と規模に於て華僑史上劃期的な現象であつた。原来、中国に於ける王朝の交替又は大規模の内乱の度毎に、日本・朝鮮・越南・暹羅・菲律賓等の周辺国家が中国の失意政客の逃淵藪となり、多数の難民に安住の地を提供した事は史上枚挙に暇ないが、明末清初の時期に東南アジア地区に出て来た華人又はその後裔の活動の内で、移住先の現地に集団的に定着して独立的政権を樹立し、これを維持した実例が少からず存することは注目すべきことである。先ず、台湾・澎湖に拠つて六十年間（一六二四―一六八三）三代に亘り果敢に清朝に抵抗しつづけた鄭氏の政権は、その地理的位置が余りにも大陸に近接し、又「復明滅清」と云う政治性が余りにも濃厚であるが故に純然たる華僑の政権とは目しがたいかも知れないが、明清交替期に海外に流亡した華人の政治活動の尤たるものであることは否定出来ない。鄭氏は三藩の乱が鎮定された後次第に孤立し、清朝の実力が増強するのに反比例して内部の動揺が激化し、遂いに施琅の率いる清朝遠征軍の来攻に

よつて、康熙廿二年（一六八三）八月鄭克塽以下悉く清朝の軍門に降つたのであるが、鄭氏政権潰滅の直前には鄭克塽一味がカムボヂアに亡命すると云う噂がオランダ東印度会社の関係筋に専ら信じられていた。[1] 勿論そう云う事態には至らなかつたが、鄭氏のカムボヂア亡命計劃と直接的に関係ある行動として、鄭氏配下の水軍の一部三千余人が礼武鎮総兵楊彦迪（楊二）や陳上川（勝才）に率いられて先ず広南の阮主（賢王、阮福瀕、一六四八―八七）に帰投し、次いで阮王の意を体して、康熙廿一年十一月（一六八二年十二月）及び廿二年初夏（一六八三年五月）の二度に亘り、南圻東浦地区の美湫（Mỹ-tho）及び辺和（Biên-hòa）に入殖して居り、本格的な南圻拓殖のさきがけとなつた。[2]

楊彦迪・陳上川の一行より十年程早く、康熙十年（一六七一）頃、雷州人鄭(莫)玖の集団が矢張り国難を逃れてカムボヂアに帰投し、後に暹羅湾岸の Banteay Meas に入殖して中国色彩濃厚な河僊（仙）鎮を建設し、一七三五年鄭玖の死後、子の鄭天賜（別名、天錫、号士麟）がその事業を継いで約八十年に亘り自主政権を維持している。

暹羅では潮州華僑鄭鏞と暹女洛英（Lok Iang）の中暹混血児である鄭昭（Phya Tak Sin, 1734～1782）が阿瑜陀耶王朝滅亡のあとをうけて、独力よく緬甸の駐屯軍を駆逐して暹羅の独立を恢復し、一七六八年には官民に擁立されて国王の位に即き、吞巫里（T'omburi）王朝を開き、暹羅の統一と国力の充実に努力して、一七八二年に弑せられるまで十余年の政権を維持したことは余りにも有名な史実である。[3]

馬来地区では、乾隆十五年（一七五〇）福建省漳州府厦門附近西興村の人である呉陽が南下して馬来半島東北部の宋卞（Songkla）に入殖し、暹羅王鄭昭と提携して同地に覇を称え、宋卞王と称し、暹羅の附庸国として八代に亘り、地方政権を維持している。[4]

更に乾隆四十年（一七七五）には広東省梅県の客家出身である羅芳伯の集団がボルネオ西部の坤甸（Pontianak）に入殖し、蘭芳公司を設立して採金に従事し、一七七七年には隣近の土著勢力を併合して、当地のスルタンをも降服せしめ、

羅芳伯は「大唐総長」に就任、東万律（Iag Mandor）を首府として独立政権を創めている。この所謂る「蘭芳大総制」は一七九五年羅氏の死後、江戊伯・宋挿伯・劉台二等が大唐総長の地位を継承して、一八八四年オランダによつて併合される迄百余年に亘り独立政権を保ち、その間十代の総長を算えている。この外に西ボルネオ地区では呉元盛を開祖とする戴燕（Tajan）王国も設立され、蘭芳公司の附庸国となつている。(5)

これらの史実を通観すると、十七世紀の末葉から十八世紀の末葉にかけての約百年間、南圻、暹羅、馬来及びボルネオ各地に於て、普通の商業・貿易活動以外に華僑が政治面にも活潑に活躍したことがうかがわれる。殊に河仙の鄭天賜、暹羅の鄭昭、宋卞の呉陽、坤甸の羅芳伯が同時代人であつたこと、しかも彼らが夫々広東・潮州・福建及び客家出身の同郷人集団をその背後に擁して各地の拓殖・経営に従事したことは極めて興味が深い。この時期は丁度オランダ・英国及びフランスの東印度会社によつて代表される西欧列強の東南亜に於ける活動が猶も通商・貿易による利潤に重きを置き、領土の積極的取得には関心薄く、華僑が拓殖事業を行うのに充分な空間が存したこと、一面には各地に於ける土著民族の人口は未だに少く、排他的なナショナリズム発生以前の状態にあり、且つ清朝興隆期の嚇々たる声威が東南アジアの土著民に畏敬の念を伴つて切実に感ぜられていたからであろう。

勿論上に列挙した史実の内で、自主的乃至独立政権は河仙鎮の鄭氏、暹羅の鄭昭、宋卞の呉陽、ボルネオの蘭芳公司の四例のみであつて、楊彦迪・陳上川の集団は相当な実力を擁し、南圻・高棉の歴史舞台で随分と活躍し、特に陳上川の集団は大舗洲（辺和）・柴棍（西貢・堤岸）を建設して南圻最初の華僑商業及び居住の中心を形成したのにも拘わらず、始終阮主将領の地位に甘んじて、自立政権を成立することはなかつた。これはマラッカ・爪哇・菲律賓在住の華僑の有力者がオランダやスペインの政庁から甲必丹（Kapitein）や雷珍蘭（Luitenant）や瑪腰（Majoor）に任ぜられて、現地の官憲に協力したのと大して変りはない。併し、南圻から暹羅湾岸にかけての地区では華僑野心家の活躍が特に目覚しく、

彼等の間に於ける地盤や勢力関係は極めて複雑であつたようである。例えば、乾隆十二年（一七四七）正月に南圻大舗洲（辺和）の福建僑商李文光が徒党三百余人と暗に結び、東浦大王と称して鎮辺営を襲撃して失敗した事件があり、[6] 一七六七年三月には潮州人霍然が古公島（Kas Kong）を根拠として、附近一帯の海島に勢力を伸ばし、沿海に出没して往来の商船を掠め、次第に強大な勢力となり、遂いに鄭氏治下の河仙をも窺うに至つたが、鄭天賜によつて急襲され、勦滅されているし、[7] 一七六九年六月には同じく潮州人の陳太が河仙鄭氏の同族鄭崇・鄭寛等と結托して河仙鎮を襲い、鄭天賜に取つて代らんとする陰謀が発覚して、鄭氏の机敏なる処置により徒党を一網打尽にされ、陳太は辛うじてシャム領の Chanta-boun に逃亡した事件もあり、[8] 翌一七七〇年七月には河仙逃兵の范儘が八百余衆の徒党を香澳（Kompong thom）・芹渤（Kampot）に聚め、馬来人やカムボヂア人の協力を得て、水陸から河仙を襲撃し、失敗した事件もあつた。[9] これら李文光・霍然・陳太・范儘等の行動は云はば挫折せる一連のクーデターであつて政権の樹立には至らなかつたが、当時の印度支那半島南部の社会にはかかる華僑による政治的行動が醒醸する素地があつたことは注目すべきことであろう。殊に、霍然・陳太・范儘らの行動は明らかに暹羅王鄭昭のバックアップがあつたもので、鄭昭時代の暹羅と河仙の関係を解明するのに重要な手がかりとなるものである。

上述の四つの政権の性格に就て考察するに、華僑又は華裔の打建てた政権と云う点では一致するが、失々成立の経緯、内部の事情及び基本的性格を異にしている。その中でも鄭昭の政権はそのリーダーが華裔であり、部下に多数の華人を擁したのにも拘わらず、始終暹羅人の立場に基いて、国家独立の恢復及び国土の統一に努力した。これは鄭昭が幼少の頃から暹羅人大臣の養子となり、宮廷及び上流社会で育ち、その生立ちが華僑よりも暹羅人であつたことにもよるが、何と云つても彼の代表し、擁護するものが華僑よりも一般暹羅人大衆の国民的利害であつたことによる。これに反して、鄭氏、呉氏及び蘭芳公司の場合は均しく起源的には華僑の移住拓殖集団であつたものが、周囲の異族に対する自衛の必要上武装

団体化し、又内部に対する統制上、政治組織をも具有するに至つたもので、明らかに海外移住華人の利益を代表するものである。特に蘭芳公司の場合は原来が一種の採金公司組織であるので、所謂る総長制（Presidential system）を採り、その標榜する政治理念も民主々義と開明な独裁主義の中間的存在であつたが、鄭氏と呉氏の場合は当初から農業集団移民の性格を帯び、新開墾地の自治政権と云う意味で土著政府の承認を取付けたものであつて、両者は形態から云つても性格から云つても酷似している。呉陽（譲）は一七五〇年宋卞に来つて赤土山（Khao Deng）で蔬菜園の経営を始め、八年後（一七五八）に仏頭廊（Phathalong）の一暹女を娶つて六子をもうけたが、衆人に人望があり、大伯と呼ばれた。宋卞は原来馬来人の土邦であつたが、呉陽が鄭昭から宋卞侯に封ぜられて以来暹羅の藩属となり、鄭昭が滅んでバンコック王朝となつても、呉氏に忠勤を励み、歴代の拉瑪王から種々の封号を受け、宋卞大守の地位を世襲して、八世（一七五〇―一八八六）に亘つて宋卞の地を統治していた。但し、呉氏の歴代は暹羅人と通婚しているので、第三代の呉天鍾（一八一二―一八一八）、第四代の呉天生（一八一八―一八四七）当りから暹羅にすつかり同化して、徐々に華僑の面影を喪失し、姓もバンコック王朝から Na Songkla の姓を賜わつている。[10] 一方、河仙鄭氏の初代たる鄭玖は一六七一年頃にはカムボヂアに至つてその「屋牙」（Oknha）に任じたが、本格的に河仙の経営を始めたのは一七〇〇年頃からと思われる。河仙は原来 Banteay Meas と称し、カムボヂア領であつたが、鄭氏入殖ののち久しからずして、一七〇八年には広南の阮主に帰属して河仙鎮と改称し、越・棉・暹三国の間に介在して次第に緩衝国としての性格を具有するに至つた。鄭玖も現地の越南婦人裴氏稟を娶り、一子天賜をもうけている。天賜はのちに述べる如く、非常に有能な人物であり、河仙が飛躍的に発展するのは一七三五年天賜が河仙鎮都督に就任してからであつて、これより一七七八年西山軍に追われて天賜が暹羅に亡命する迄の四十三年間、河仙は南中国海に於ける華僑の小王国として、政治的には広南と暹羅の両国に朝貢するが、文化的には中国文化の前哨基地として富み且つ栄えたのである。鄭氏は広南の阮主に対しても忠勤をつくし、結局西

山の乱で阮主と運命を共にしたが、終始土著化されることなく、毅然として中国の伝統的な倫理と文物制度を維持した点に於て、宋卞の呉氏とは又頗る趣が異るのである。

河仙鄭氏の事蹟に就ては既に E. Gaspardone 氏[11]、藤原利一郎氏[12]及び筆者[13]が各方面から論考を加えて居り、鄭玖・鄭天賜両氏の史実及び対外関係のあらましはほぼ明らかになつたが、細部にわたつては尚今後の研究に俟つ所が多い。例えば、対外関係の面で云えば、鄭氏と越南（広南の阮主）及びカムボヂアとの関係は割合と明瞭にされたけれども、河仙とヨーロッパ諸勢力との関係、中国や日本との通交関係、或は鄭氏（鄭天賜）と暹羅王鄭昭との関係の如きは何れも今後解明を要する問題である。殊に鄭・鄭両氏の関係は印度支那華僑史上の重要な研究課題であると云わねばならない。両者共に華裔（中越混血児と中暹混血児）の出身で国王となり、当初は両者頗る友好的であつたが、後に暹羅及びカムボヂアで発生した数多の事件のために両者の利害が対立し、更には敵対するに至る。両者の間には一応和解が成立し、西山の乱に際しては鄭天賜は鄭昭を頼つて暹羅に亡命するが、間もなく一家諸共鄭昭の誤解をうけて殺害される。併しいくばくもなく、鄭昭自身が又逆臣の弑する所となり、要するに最後的には両人とも非業の死を遂げることになる。誠に不思議な縁につながる二人の風雲人物であると云わねばならない。一方、対内関係の面に就て云えば、河仙の政治制度、拓殖開墾事業の具体的状況、或はその文教政策や文学活動の情況等何れも今後追求すべき研究題目であろう。本文は河仙に関するこれら諸問題の内、最後の文学活動に就て若干の論考を加え、同時に所関作品の紹介を行いたいと思う。

二、中国文化及び伝統の継承者としての河仙

河仙政権の建立者である鄭玖がカムボヂアに赴いた動機に就ては、大南列伝前編（巻六）鄭玖伝に、

明亡、清人令民薙髪、玖独留髪而南投于真臘、為屋牙、

と見えて居り、大南寔録前編（巻八）顕宗戊子十七年条の所載も略同じい。鄭懐徳の嘉定通志（巻五）疆域志（以下通志と略称する）では、

於大清康熙十九年明亡、不服大清初政、留髪南投于高蛮国南栄府、

とあり、又武世営の河僊鎮叶鎮鄭氏家譜（以下家譜と略称する）では、

因不堪胡虜侵擾之乱、於辛亥年十七歳越海投南真臘国為客、

とも見えている。

一方、一六五〇年頃福建省漳州府竜溪県から中圻順化（Huế）附近の明香（郷）社に移住して来た陳養純の南投の動机に就て、承天明郷社陳氏正譜は、

避乱南来生理、衣服仍存明制、

と述べ、[14] 又阮初の功臣にして明香（Minh-hương）出身でもある鄭懐徳はその祖父鄭会の南投に関して、

以満清入主中国、不従変服薙頭之命、留髪南投、客于辺和鎮福隆府平安県清河社、受一廛為氓、

と記している。[15]

これらの史文に徴するに、明末清初の交、中圻や南圻に南投して来た華商の多くはいづれも異族満清の統治に屈することを屑しとせず、特に具体的には変服薙髪の令（順治二年＝一六四五年発令）に抗して故郷を後にした人たちであつて、従つて海外に到つても依然として長髪を貯え、且つ衣服も明代の服制にあくまで従つたことがわかる。これは十七世紀の越南華僑社会に見られる一般的風潮であつて、一六八八年北圻に赴いた William Dampier はその東京旅行記にて、同地居留華商が総て満清征服以前の明代の習俗に則つて髪を長く伸し、背部に編んでいることに注意している。[16] 別に Dampier は同地の明朝に忠誠なる華僑が他地区の華人と同じく賭博に熱中することに言及し、彼等は賭博に負け、金銭・所

有物や衣服を取上げられてスッカラカンになると、今度は妻子をカタにして勝負事を続け、これもすられてしまうと最後には彼等にとつて最も貴重な物、即ち頭髪を抵当にしてばくちを続行すること述べている。[17] これは当時の中国人が如何に頭髪を大事にしたか、引いては如何に清朝の薙髪令に反撥したかの傍証である。又一六九五年（康熙三十五年）中圻会安（Faifoo）に到つた広州長安庵の禅僧釈大汕も会安の華僑区である大唐街の住民が「悉閩人、仍先朝服飾」であることを記している。[18] 按ずるに、釈大汕が中圻を訪問した年代は永暦帝（桂王）の罹難（一六六一）から三十四年を経て居り、台湾鄭氏政権の潰滅から十二年経つているのにも拘わらず、越南の華僑が猶も明代の服装を維持することは注意すべきである。要するに、これらの人士は中国古来の習俗や伝統を保持する為に敢て父祖の墳墓を放棄し、海外の新天地に安住の地を求め、自己のユートピアを建立せんとした事がわかる。云わば、これらの人々は中国「正気」の所在であつて、陳養純・鄭会の南投、陳上川とその部下が大舗洲（辺和）や柴棍（西貢、堤岸）を建設したこと、鄭氏父子が河仙の経営にその生涯を献げたことは均しくかかる正気の発露であると見ることが出来る。

鄭氏の南来がかかる清教徒（ピュリタン）的な崇高な伝統芦持の使命感に基いている以上、その隷下にある人民、その支配下にある社会も又中国古来の伝統に則つたものである事は容易に想像される所である。鄭氏父子が河仙にて善政を布き、農業や対外貿易を促進し、当時遠東のこの地区に於ける最も富める穀倉となつたことは一七四九年当地を訪れた Pierre Poivre も書き残しているが、[19] 天賜時代の河仙社会の情況に就いては何と云つても清文献通考（巻二九七、四裔、港口条）が次の如く鮮明なイメージを提供している。

国内多崇山、所轄地纔数百里、有城以木為之、宮室与中国無異、自王居以下皆用磚瓦、服物制度彷彿前代、王蓄髪戴網巾紗帽、身衣蟒袍、腰囲角帯、以韡為履、民衣長領広袖、有喪皆衣白、平居以雑色為之、其地常暖、雖秋冬亦不寒、人多裸而以裳囲下体、相見以合掌拱上為礼、其風俗重文学好詩書、国中建有孔子廟、王与国人皆敬礼之、有義学選国

人子弟之秀者及貧而不能具修脯者紘誦其中、漢人有僦居其地而能句読暁文義者則延以為師、子弟皆彬彬如也。

清文献通考の校刊は高宗乾隆十二年（一七四七）であるので、この記事によつて窺われる景観は正に一七四〇年代の港口国（即ち河仙）の実況であり、それは同時に儒家の脳裡に描かれた中国社会の理想図ですらある。殊更に表立つて言明はしないけれども、この記事は可成りの賞讃と感服を伴つて書かれたものと推察せられ、海外の異邦や蛮夷に対する中国史書や類書の常套的な軽侮・卑視の態度はみぢんも見受けられない。

河仙の服制に関しては家譜に別伝があり、次の如く述べている。

辰我孝武皇帝（筆者註：即ち武王阮福濶、一七三八—六五）絶交州（筆者註：即ち北圻の鄭主を指す）之貢、大一統之興、製定礼楽・法度、重新改易衣服、依漢朝品制、命我公（筆者註：即ち鄭天賜）遵奉、公喜奉上命、遂製衣服冠帽、興学校而風俗華美備焉、蛮獠諸国聞之、莫不欽仰畏服、

武王は家督を継いで阮主となつてから六年目に、具体的に云うと甲子六年四月十二日（一七四四年五月廿三日）に諸臣の請に依つて初めて王位に即き、王を称したが、同時に大いに政制を改易し、風俗の粛整を計つた。寔録前編（巻十）同年条に、

上又以識文有「八世還中都」之語（筆者註：武王阮福濶は第八代の阮主である）、乃改衣服易風俗与民更始、参酌歴代制度、定文武朝服、文自管部至占候・訓導、武自掌営至該隊、冠飾金銀、衣用蟒袍及綵緞有差、於是文物煥然一新矣、

と見えて居り、阮主の服制は大体この年（一七四四）になつてから具備するに至つたと思われるが、上引の家譜の記事は鄭氏河仙の服飾が阮主武王の指示に従つたことを暗示している。一方、寔録前編と家譜が問題にしているのは明らかに文武百官の服制に関する規定であるので、河仙が阮主に隷属する一つの鎮である以上、官吏の服制について阮主の夫に従う

ことは充分考えられる所であるが、清文献通考の記事は一般人民の服装や社会習俗に関して、河仙は建立の当初から明朝の遺制に準拠して、独自の体制を維持した事を強く示唆している。そうであつたからこそ、乾隆初年の清文献通考の編者には「服物制度彷彿前代」として印象付けられたのである。

次に清文献通考は河仙の風俗が文学を重んじ、詩書を好むことの具体的な実証として、孔子廟の建立と義学の設立を挙げているが、ここで先ず明らかにすべきことは河仙に於けるかかる文教の重視は二代目の鄭天賜になつてからである。[20] 初代の鄭玖は Pierre Poivre も述べる如く、出身が商賈である上に、開拓事業に忙しく、辺境も多事であつたので、文教を顧る余暇はなかつたようであるが、二代目の天賜は大南列伝前編（巻六）鄭天賜伝に、

天賜幼聰敏、博洽経典、通武略、

とあり、又家譜には、

公賦性忠良、仁慈義勇、才徳倶全、兼博通経史、百家諸子之書無不洽、蘊胸懐而武精韜略、

と見える如く、文武双全の好学の士であつたので、上引の清文献通考の記事は明らかに天賜が河仙鎮都督に任ぜられた一七三五年以後の事と見ねばならない。

天賜が孔子廟を建立した事は大南寔録前編には見えていないが、通志（巻五）には、

開招英閣、購書籍、日与諸儒講論、

とあり、大南列伝前編（巻六）にも、

又招来四方文学之士、開招英閣、日与講論唱和、

とあり、又家譜には、

建招英閣以奉先聖、又厚幣以招賢才、自清朝及諸海表俊秀之士聞風来会焉、

とあつて、均しく招英閣の設立を記すが、殊に家譜の記事は招英閣即ち孔子廟であるが如き書き振りである。河仙明郷の出身で郷土史研究家である東湖氏（本名・林晉濮）は家譜の記事と後出の河仙十詠の天賜の自序に依拠して、招英閣が孔子廟でもあり、天賜が諸儒と談論した所でもあり、詩社の所在でもあり、義学の存した所でもあると見ている。管見によれば、招英閣が即ち孔子廟であると云うことは過去の中国や越南の例を見ても有得ることではなく、招英閣はその名称からしても、遠来の学者・文人を含めた俊英の士を遇した迎賓館であり、天賜が文人・墨客と談論し、河仙文学活動の中心であつたことは疑のない所である。往時の河仙がその周辺に卓絶した文明社会であつたことは当時の詩句（作者不明）に詞賦曽華文献国、文章高屹竹柵城（竹柵城は河仙の異称）とあることによつても窺われるが、今仮りに天賜を中心とする詩人・墨客を招英閣派と称するならば、これは年代は稍後れるが、嘉定の鄭懐徳を中心とする山会（又は嘉定三家詩社）と共に南圻明郷文学の双璧をなすものである。只惜しむらくは招英閣派の具体的な作品集として今日に残るのは僅かに河仙十詠集のみである。

三、河仙十詠の撰成と明渤遺漁集

河仙十詠は天賜が選定せる河仙十景を天賜及びその詩友が詠じた七言唐律詩を集めたのであるが、十景の名称は寔録前編（巻九）、列伝前編（巻六）及び歴朝憲章類誌（巻四十三）に夫々見えているが、その間には多少の異文が存する。次に東湖氏の著「河仙十景」によつて列挙しよう。[21]

一、金嶼瀾濤　二、屏山疊翠　三、蕭寺晨鐘　四、江城夜鼓　五、石洞呑雲
六、珠巖落鷺　七、東湖印月　八、南浦澄波　九、鹿峙村居　十、鱸溪漁泊

列伝前編は叙上の十の題目を挙げたのち、更に十詠に作品を寄せた中越の詩人に言及して、

清人朱璞・陳自香等二十五人、国人鄭連山・莫朝旦等六人和韻集中凡三百二十篇、天賜為之序、

と述べ、潘輝注の歴朝憲章類誌（巻四十三）詩文類には河仙十詠（ママ）を二巻として、

皆天賜命題而北国順広文人相與属和凡二十六人、集中共三百二十篇、

となしているが、要するに河仙十詠は天賜が出題せる河仙十景に就ての和韻の詩集であり、一人づつ十詠として、三十二人（天賜も入れて）で、合計三百二十首の詩を収めたものであることは明らかである。

一九五六年筆者が「河仙鎮叶鎮鄭氏家譜注釈」を国立台湾大学文史哲学報第七期に発表した際には、通志、歴期憲章類誌及び黎貴惇の撫辺雑録等を参照して、河仙十詠の天賜序文や唱和せる中越詩人のリストの異文を併せ録して若干考証を加えたが、その際河仙十詠の全文が堤岸（ショロン）在住の華僑学者李文雄氏及び崔蕭然氏によつて一九五〇年既に公けにされていることを知らなかた。筆者は一九五八年西貢にて李文雄氏からその南海民族英雄伝を贈られ、始めてそのことを知つたのであつた。同伝は越南小説集第一巻として出版せられ、歴史奇情長篇と銘打つて、内容を廿五回（節）に分け、鄭玖・鄭天賜父子河仙経営の事跡を物語つたものであり、その縁起に述べる如く、家譜やその他の越南史書をも参考しているが、流布の範囲が堤岸華僑社会の極く一部に限られたため吾人の注意を引くに至らず、且つその内容は何と云つてもフィクション的な色彩が濃厚であるので吾人の研究に引用することはさしひかえなければならないが、同伝の附録として河仙十詠の全文が録されている。李氏が複刻した河仙十詠は南圻 Bên Tre 省香点（Hương-điểm）在住の越南史家黎寿春（Lê-Thọ-Xuân）氏の家蔵本によつたとのことである。その黎氏蔵本には天賜の序文以外に、余錫純と陳智楷（淮水）両人の跋も載せられているが、李氏複刻本の編後語にはこれが原刊本であるか、鈔本であるか明らかにしていない。但し東湖氏によると、李氏は一九四五年の「国変」（越盟政権の成立を指す）以前に黎寿春氏の所蔵に係わる「明渤遺漁」木刻本から抄出したとのことであるが、[22] これには疑問がある。更に李氏複刻本は印刷の際の校正の不注意にもよるかと思われる

が、明らかに誤植或は誤鈔と思われる個処が少くない。東湖氏は何らの批判も加えずに、これによってその越語訳をなしているのは遺憾である。[23]

河仙十詠の鄭天賜序文は撫辺雑録（A）と歴朝憲章類誌（B）に見えているが、今これを李氏複刻本（C）と対照して、比較的原文に近いと思われるテキストを再現してみよう。

安南河僊鎮、古属遐（C：羌）陬、自先君開創以来三十余年、而民始獲安居、稍知栽植（B：種）、乙卯（B：西）夏先君捐館、余（B・C：予）纘（B：纂、C：継）承（A・B：永）先緒、理（C：政）事（B・C：治）之暇、日与文人談史論（C：詠）詩、丙辰春粤東陳子淮（A：性）水（A・B欠文）航海至此、余（A・C：予）待為上賓、毎於（A・B欠文）花晨月夕、吟咏（C：詩）不輟、因将河僊十景相与属和（A・B：相属知己）、陳子（A・B：子性）樹幟騒（B：鶏）壇、首倡風雅、及其（C：其後）返棹（B：掉）珠江、分題自（B・C：白）述（B・C：社）、承諸公不棄、如題詠就、彙（C：叠）成一冊、遙寄示（A：于）余、因（A：印）付剞劂、是知山川得先君風化之行、増其壮麗、復得諸公（A・B：名士）品題、益増（A・C：滋）其霊秀、此詩不独（B：但）為海国生色、亦可当（C：作）河僊誌乗云爾、丁巳（A・B・C：己）季夏、上浣鄭（A・B：鄭）城莫（A・B欠）天錫（C：賜）士麟氏自序於（A・B欠）樹徳軒。

この序文によって、先ず河仙十詠は丁巳年（乾隆二年＝一七三七）河仙にて刊行されたことがわかるが、同時に、序文後段の意味から推察するに、この詩集は天賜の先君、即ち鄭玖に対する追悼紀念出版の意味をも兼ね、又河仙そのものを中国の文化界に紹介する意味合をも含めたものと解せられる。その刊行の年次が天賜の家督を継いで僅か二年後であることに注目せねばならない。

更に、この序文で明らかにされた事は、河仙十詠の撰成に最も大きな役割を演じたのは粤東（即ち広州）の詩人陳智楷

（号淮水）であつて、[24] 彼みずから集後の跋に述べる如く、丙辰年（一七三六）河仙を訪れて、半ケ年程滞在した間に天賜の殊遇を得、相共に河仙十景を釐定して唱和したが、広東に帰還後、彼の仲介や連絡によつて閩粤を中心とする華南の詩人たちの和韻を得、これを集めて天賜の許に送つて寄したのである。故に河仙十詠に詩を寄せた華南の詩人の大多数は河仙に来て親しく河仙十景に接したわけではないのである。従つて、通志（巻五）が天賜に酬和した人物として多くの中越詩人の名前を列挙し、引続いて、彼等が「接跡而至」云云と述べているのは事実と合わない。

河仙十詠にて天賜と唱和した詩人の名前のリストは通志（巻五）・撫辺雑録（巻五）及び李氏複刻本に見え、部份的には歴朝憲章類誌（巻四十三）詩文類及び列伝前編（巻六）に見えている。次に李氏複刻本（A）を底本とし、通志（B）及び雑録（C）を参考にして、天賜をも含めた三十二人の原藉、姓名、別号及び省別を挙げることとする。

（原籍）	（姓名）	（別号）	（省別）	（附註）
莫城	莫天錫	士麟	越南	寔録前編・列伝前編では何れも「天賜」となすが、民間は「天錫」とも称する。
韶石	朱璞	仁宝	広東	B：朱瑾
紫水[25]	呉之翰	敬堂	広東	
南海	李仁長	元宝	広東	B・C：李仁長。A：李仁長元。Bは福建人となす。
鑑水[26]	単秉馭	石亭	広東	
番禺	王昶	日永	広東	
古閩	方銘	元運	福建	
陽羨	路逢吉	星来	江蘇	Bは広東人となす。
丹霞[27]	徐叶雯	子章	江西	B・C：徐叶裴、Bは福建人となす。

韓江	林維則	（欠）	福建
古閩	徐　鉈	景献	福建
竜溪	林其然	若之	福建
丹霞	陳維徳	自俊	江西
海陽(28)	鄭蓮山	如佳	越南
霞浦(29)	徐登基	常五	福建
韓水	湯玉崇	放菴	広東
肇豊	潘天広	錦江	越南
竜溪	陳緒発	倩夫	福建
同安	黄寄珍	席侍	福建
交州	阮　儀	竜湫	越南
維揚(30)	周景揚	愈謙	江蘇
交州	陳　禎	天霽	越南
呉陽(31)	陳瑞鳳	（欠）	江西
同安	陳自蘭	懐遠	福建
銀同(32)	陳躍淵	（欠）	福建
明香	陳鳴夏	天聞	越南
五羊	陳演泗	雲沢	広東

B・C徐鉈

B・Cは広東人となす。

Bは福建人となす。

Bは嘉定人とし、Cは南国人となし、列伝前編は国人となす。

A：霞漳

B：湯玉栄

B：潘大広

B：陳伯発

Bは広東人となす。C：黄奇珍

Bは肇豊人となす。

A：維陽　B：周景陽

B：陳頑、肇豊人となす。

Bは広東人となす。

B：陳自南

B・C：陳耀淵

Bは福建人となす。

B：陳渉四

交州	鄧明本	天機	越南	Bは肇豊人となす。
明香	孫天珍	錫玉	越南	B：孫文珍、広東人となす。
鷺江	孫天瑞	錫祥	福建	Bは広東人となす。
交州	莫朝旦	成弼	越南	Bは肇豊人、Cは南国人、列伝前編は国人となす。
鷺江	孫季茂	二斯	福建	C：孫秀茂

上掲のリストに見える人たちは李氏複刻本で各人十首づつ作品を寄せているので、確かに河仙十詠の同人と見られるが、これに見える各人の原藉は決定的なものでないことに注意すべきである。例えば、孫天珍と孫天瑞の両人は別号も錫玉と錫祥であつて明らかに兄弟と思われるが、前者の原藉は明香、後者は福建の鷺江となつている。明香社は中南圻に於ける明末中国移民の村落であつて、明命八年（一八二七）から以後は「明郷」社と称せられるが、一七三〇年代には南圻の藩鎮（嘉定）及び河仙、中圻の承天府（順化）及び会安に夫々明香社があつたのであるから、どの明香社の出身であるかわからないし、又天瑞にしても明香社に居住していながら鷺江の出身と称しうるわけである。要するに孫氏兄弟の場合、確実にわかるのは孫天珍は福建の鷺江（即ち同安県）から越南に移住して、明香人となつたと云うことだけである。同様な例は他の人々に就ても云えることで、原藉として中国の地名を挙げるけれども、実は越南に僑寓している人であつたり、或は何らかの理由によつて中国の祖藉を挙げることを好まず、原藉を明香とする者もいると思われる。只、原藉を交州とした阮儀・陳禎・莫朝旦の三人は確実に越南の現地人であつたようである。

通志は上掲の人名以外に、福建省文人として謝璋・王得路、広東省文人として梁華峰・余錫純・盧兆瑩、嘉定府人として黎伯評、帰仁府人として釈氏黄竜和尚、福建道士蘇寅の八名を挙げるが、方銘・孫季茂・莫朝旦の三人を欠くので、全部で三十六名（天賜を除いて）になつている。一方、雑録の挙げたリストは人数も順序も李氏複刻本上掲のリストに合致

するが、鄭蓮山・潘天広・阮儀・陳禎・鄧明本・莫朝旦の六名を南国詩人となし、その他の廿五名を北国（即ち中国）の詩人となしている。

更に省別によつてみると、通志では福建省文人は十五名、広東省文人は十三名、肇豊府は潘大広（ママ）・阮儀・陳頑（ママ）・鄧明本の四名、嘉定府は鄭蓮山・黎伯評の二名、帰仁府は黄竜和尚・福建道士蘇寅の二名、計三十六であるが、特に肇豊府の潘・阮・陳・鄧の四名が雑録では南国詩人となつて居り、又李氏複刻本では均しく原藉を交州となしているので、この肇豊府は広東の肇慶府の誤植ではなく、明らかに北圻の肇豊府を指したものと思われる。一方、李本に基いた上掲の人名のリストでは、福建が十一名、広東が七名、江西が三名、江蘇が二名、越南（明香を含む）が八名となつている。

按ずるに、通志の撰者鄭懐徳は自身が南圻明香の出身であり、鄭天賜に深く私淑して、河仙十詠をよくよんで居り、而も後で述べる如く、天賜の明渤遺漁集を複刻している位であるから、河仙十詠にて天賜と唱和した詩人の名前は適確に知つていた筈であるにも拘わらず、当の河仙十詠に作品をのせていない謝璋・王得路・梁華峰・余錫純・盧兆瑩・黎伯許・黄竜和尚及び蘇寅道士の名を挙げたのは明らかに我々には知られていない別個の所伝に基いたもので、彼等が何れも天賜の詩友であつたことを云わんとしたのであろう。[33] それにしても奇異に感ぜられるのは、陳智楷（淮水）は天賜の序にも見えるとほり、河仙十詠編撰の中心人物と目せられる人であり、且つ十詠の集後に跋を書いているのであるが、十詠集の中に彼自身の唱和した詩が見えないことである。これは如何なる理由に基くのか、現在の史料の状態では明らかにし得ない。

天賜と河仙十詠で唱和し、或は詩友として交つた詩人の多くはその伝記を明らかにし得ないが、謝璋、黄竜、王昶、余錫純の四人に就ては若干の所伝が存している。先ず、謝璋に就ては通志は福建省文人となすが、河仙の屏山に現存する墓碑の一つに、「中議大夫議璋字又柱謝先生之墓」と云うのがあり、戊寅年（乾隆廿三年、一七五八年）季秋に子息の表栄、表華によつて建立されたことがわかつているので、謝璋は福建より河仙に来つて、天賜に仕え、同地にて歿したことがわ

かる。次に黄竜に就ては、福建列伝（巻三十四）に、

黄竜、字見候、永春人、康熙間官至南澳総兵、致仕後愛仙遊風土之勝、

と見えているが、列伝前編（巻六）には別に黄籠（ママ）の略伝があり、中圻平定の人で、河仙の白塔山に卓錫し、丁巳年（一七三七）同地にて示寂したとあるので、或は福建の黄竜が致仕ののち南に来つたのかも知れない。次に、王昶に就ては、広東通志（巻一九七）芸文略九に、

王昶、字永日、番禺人諸生、雍正乙卯（一七三五）会開鴻博科、薦而不就、有柳塘詩集、

と見えている。別に凌揚藻の国朝嶺海詩鈔（嘉慶二十五年刊）巻七にも王昶（ママ）の略伝があり、広東通志と殆ど同文である。次に、余錫純は河仙十詠に跋を書いて居り、天賜との関係も比較的深いと思われるが、広東通志（同巻）では、

余錫純、字兼五、順徳人、有語山堂文稿三巻及語山堂詩十二集、

とあり、更に国朝嶺海詩鈔（巻五）には次の如き所伝が見えている。

余錫純、字兼五、順徳人、貢生、官陽江訓導、著有語山堂集、羅石湖曰、安南河仙鎮有番官莫姓者、従海賈見（兼）五詩、酷慕之、俟海舶帰、輒以土物易其新詠、

この記事に見える「番官莫姓者」は勿論鄭天賜のことであつて、如何に天賜が故国の文人詩伯との交遊を希求していたかがうかがわれるのである。(34)

河仙十詠は丁巳年（一七三七）河仙にて刊行されて以来、越土の詩人に広く愛誦されたようである。黎貴惇は撫辺雑録（巻五）にて、「僕常見其河仙十詠刻本」と述べ、潘輝注も又歴朝憲章類誌（巻四十四）文籍志にて、「詩皆婉麗可誦、有刻本刊行」と記している。この外に、明渤遺漁集を始め、種々の詩文集が招英閣から刊行されたようであるが、河仙は己未年（一七三九）春真臘王匿盆の侵入を受け、一七七一年には暹羅王鄭昭の軍隊によつて攻略・破壊せられ、一時暹羅軍

に占領せられる。二年後（一七七三）鄭昭と天賜の間に妥協が成立して、河仙は一旦　氏に返還されたが、引続いて西山の乱の発生により、一七七八年には西山の手に帰し、天賜一家は暹羅に亡命するの止むなきに至つた。これらの動乱を経て、河仙の書籍・文物は殆ど烏有と化したようである。列伝前編は上引の如く、河仙十詠の刊行について記したのち、

其後遭乱詩多散亡、迨嘉隆年間協総鎮嘉定鄭懐徳購得溟渤遺漁一集、印本行世、

と述べ、通志（巻五）も

琮徳侯（即ち天賜）著有河仙十咏、明渤遺漁刻本行世、

と述べ、又大南寔録正編第二紀（巻三）明命元年（一八二〇）五月条に、吏部尚書在任中の鄭懐徳が嘉定通志（三巻）と明渤遺漁文草書を明命帝に献じたことが見えているので、一般の人は明（溟）渤遺漁集が即ち河仙十詠であると同一視し、鄭懐徳が河仙十詠を複刻したように見なしているが、これは誤解であつて、事実上河仙十詠と明渤遺漁集とは河仙原刊の別個の詩集である。河仙十詠の方は越南民間に時折抄本の存するものがあり、河内のフランス遠東学院（ms. A. 441）と順化の保大書院にも夫々抄本を有するが、明勃遺漁集の方は河仙招英閣原刻本も、鄭氏複刻本も皆目所在が知られていない。東湖氏の如きは二十余年来この詩集を物色しつづけて未だに探出すことが出来ず、去年発表した招英閣に関する史料と文料（献）と題する論文にても、広く読者の協力を求めている程である。

併し、明渤遺漁集の鄭氏複刻本は一九四〇年頃には尚存在しており、諤川氏によつて一九四三年四月西貢で出版された大越雑誌の第十二号に紹介されているので、間接的ながらもその内容及び体裁のあらましを知ることが出来る。諤川氏によると、鄭氏複刻本の表紙には「原板招英閣、艮斎飜刻蔵板」（艮斎は鄭懐徳の別号）と記してあり、全巻当時中越の名筆の手になる楷、草、篆、隷各書体の字で刻せられ、各頁には詩一篇づつが収められるが、その周囲には唐草模様をあつらえたくまどりがしてあり、且つ相対する別の頁にはその詩にちなんだ水墨による山水画が載せられて居り、謂わば豪華

版の詩画集であつたとのことである。最も珍重すべきは十二葉に及ぶ鄭艮斎（懐徳）の自筆（草書体）になる新序があるとのことである。この序文は富春京（現ユエ）の公署にて記され、明命二年（一八二一）孟夏の年次を有している。この鄭氏複刻本の明渤遺漁集は鄭氏の新序以外に、巻末には二篇の跋があり（作者は誰か、諤川氏は明記していない）、全部で賦一篇及び三十首の詩を収録するが、いづれも天賜の作であり、「鱸溪閑釣」の題のもとに詠吟されたものである。

次に、鄭氏の新序については、諤川氏はその原文を録していないが、その内容を越文に訳出している。そのあらましは鄭天賜の出身、生涯、その文学に対する愛好をほぼ叙し、次に河仙十景を紹介して、河仙十詠の刊行にもふれ、明渤遺漁集は天賜自作の賦一篇（百余句を含む）と三十二首の詩を収め、河仙十景の一つである鱸溪を詠じたものであるとし、又鄭氏は若くして河仙原刊の

一、河仙十景総集、
二、明渤遺漁詩草、
三、河仙詠物詩選、
四、周氏貞烈贈言、
五、詩伝贈劉節婦、
六、詩草格言微集、

計六種の刊本を読んで、天賜の人格・精神に深く傾倒し、永らくその作品を蒐集せんとして果さず、庚辰年（一八二〇）夏、朝命によつて帰京（順化）した際、たまたまその鱸溪閑釣集（即ち明渤遺漁集）を得、始めてこれが丙辰年（一七三六）二月、招英閣で印行されたことを知つた。その原本は蟲蝕によつて既に数段欠文があるので、鄭氏が補訂をし、印行に附したと云うのである。(35)

以上が鄭氏新序の概要であるが、それによってみるに、明渤遺漁集の刊行は丙辰年（一七三六）、即ち天賜が家督を継いだ翌年であり、河仙十詠の刊行よりも一年早い。「明渤」なる名称の起源は明らかではないが、通志（巻五）疆域志によると嘉隆末年頃河仙鎮所轄の五十二社村站庸所属隊瀋の中、越南十九社村（明香社、富国島明香属を含む）、高蛮（カムボヂア）二十六瀋（soc 即ち聚落）及び閣問（馬来人）一隊の外に次の如き唐人六庸所站属の名称が見えている。

明渤大庸、明渤新庸、明渤奇樹庸旧名核棋、
明渤鱸溪所旧名瀝越処、明渤土邱站旧名杌站、富国唐人属、

これによって見るに、河仙管下で凡そ中国人の居留する庸、所、站、属には「明渤」なる名称が附せられて居り、「明香」なる名称が明朝の香火を継承する意味を含んでいることと同じく、「明渤」も明朝の渤興をこいねがう願望を表わしたものと見られよう。

上述せる如く、明渤遺漁集の全貌は伝わらないが、その遺文は若干残っている。それは唐律詩二首と賦の一部份を含んで居り、河仙鄭氏の祠廟たる忠義祠の正殿の壁上に書かれたもので、東湖氏によって抄出されている。次にその遺文を掲げる。(36)

鄭令公原作鱸溪閑釣三十韻之一二首。

其一

鱸溪泛泛夕陽東　冰線閑抛白錬中　鱗鬣頻来黏玉餌　烟波長自控秋風　霜横碧籠虹初霽　水浸金鉤月在空
海上斜頭時独笑　遺民天外有漁翁

其二

溪上流黄夜色溶　黏鉤閑釣五更鐘　四辺露気浮沈外　一縷波光幾万重　恬潔毎憐鷗鷺狎　行蔵応付水雲共

満舟風月堪娯処　老倒滄溟入酒鍾

鄭令公原作鱸溪閑釣賦存此数段。

片帆烟水、両桨滄浪、
不知栄富、任楽康荘、
宜浮游於天外兮、恒出没乎江洋、
既飄零於漁泊兮、其栖息乎江郷、
已多情於張子兮、将有意於厳光、
慕季札之尚清薇兮、湎鴟夷之事溟茫、
復知、
引任公之釣兮宜乎舒捲、
浮仲由之桴兮允矣行蔵、
縦繫此生乎南海、
楽造物乎前程、
有時遇於風高浪震兮、多使人於汗駭魂驚、
有時瞰乎穀紋漣漪兮、多使人於心曠神清、
有時覩於魚躍鳶飛兮、多使人於道理流行、
有時見乎行雲流水兮、多使人於物我忘情、

更に河仙十景に関聯する作品として言及せねばならないのは天賜には別に越南俗語による所謂る喃詩も存することであ

る。これは河仙十景吟曲（河仙国音十詠とも称せられる）と題するもので、従来刊行されず、口伝で伝つたもので、鄭懐徳もこの作品には言及していない。内容は双七六八体による吟曲十篇より成り、各篇十段に分たれ、終段は唐律の喃詩となつて居り、各篇が河仙十景の内の一景を詠じている仕組となつている。巻末には河仙十景総詠と題する喃文による唐律詩があり、十景の名称及び各自の特色が詠み込まれている。全巻計三三四句の双七六八体吟曲と十一首の唐律八十八句の詩句を含んで居り、且つ各篇の吟曲と唐律の間にも押韻がなされていることが特色であつて謂わば中越詩体混淆の作品である。[37] このことは天賜が漢詩のみならず喃詩にも秀れていたことを証するものである。

最後に疑問を一つ提出しておきたいのは、上文の考察で明らかな如く、明渤遺漁集にしても、河仙十詠にしても、何れも天賜が家督を継いだ直後二、三年間の詩集である。按ずるに、天賜は乙卯年（一七三五）から戊戌年（一七七八）に至る四十三年間河仙の都督であつたのであるから、その詩文集はもつともつと存した筈である。上引鄭懐徳の新序に挙げられた六種の河仙刊本の内、河仙十景集と明渤遺漁詩草は別として、あとの四種で、河仙詠物詩選を除いた他の三種は何れもまとまつた集子であるとは目しがたい。要するに天賜乃至は招英閣グループの文学作品がどうして明渤遺漁集と河仙十詠以外に伝わらなかつたのか、換言すれば河仙の詩文がどうして天賜時代初期のものしか伝わらなかつたのか、これは我々に残された課題であつて、今後の調査研究によつて解明せねばならない。

附註

（1）板沢武雄、阿蘭陀風説書の研究、一九三七年、頁一一六―一一七。

（2）拙著、清初鄭成功残部之移殖南圻(上)、新亜学報第五巻、第一期、一九六〇年、頁四三三―四五九。

（3）朗韋吉懐根著、許雲樵訳、暹羅王鄭昭伝、史地小叢書、商務印書館、民国二十五年。陳毓泰訳、鄭王史弁、南洋学報第二巻第一輯、一九四一年、頁十八―三四。

（4）呉参（Chom Nasongkhla）、宋卡紀年（Bongshavatar Muang Songkhla）、一九一四年、初版の暹羅史料編彙（Prachom Bongshavatar）の第三巻に収められてゐる。

（5）羅香林、西婆羅洲羅芳伯等所建共和国考、民国五十年、香

港。

（6）李文光事件に関しては鄭懐徳、嘉定通志（巻二）、山川志、辺和鎮大舗洲条；清文献通考（巻二九六）安南条；黎貴惇、撫辺雑録（巻五）に所関の史文が見えている。

（7）大南寔録前編（巻十一）丁亥二年（一七六七）三月条；大南列伝前編（巻六）鄭天賜伝。別に、宋福玩、楊文珠共編「暹羅国路程集録」（新亜研究所東南亜研究室史料専刊之二、一九六六年刊）の海門水程、古公海門条では霍然を「豁然」と称し、その事跡に触れている。

（8）陳太は通志では「陳大」、家譜では「陳孽」となっている。陳太の乱のてんまつは寔録前編（巻十一）及び通志（巻五）に見えている。

（9）寔録前編（巻十一）庚寅五年（一七七〇）秋七月条。

（10）呉参著宋卡紀年；別に許雲樵著北大年史、民国三十五年、頁一四二―一四三には呉家の系図が見えている。

（11）E. Gaspardone, Un Chinois des mers du Sud, le fondateur de Hà-tiên, Journal asiatique, 1952, Paris, pp. 363～385.

（12）藤原利一郎、鄭玖事蹟考、史窓、第五・六号、一九五四年、頁一―一一。

（13）拙著、河僊鎮叶鎮鄭氏家譜注釈、文史哲学報、第七期、民国四十五年（一九五六）、頁七七―一三九。

（14）拙撰、承天明郷社陳氏正譜、新亜研究所東南亜研究室、東南亜研究専刊之四、一九六四年、頁四一。承天明郷社成立の過程については拙著、「承天明郷社與清河庸」、新亜学報、第四巻第一期、一九五九年、頁三〇五―三二八にくわしい。

（15）鄭懐徳撰、艮斎詩集、東南亜研究専刊之一、一九六二年、頁一二六。

（16）William Dampier, Voyages and discoveries, with an introduction and notes by Clennell Wilkinson, Lnodon, 1931, pp. 17～18.

（17）Ibid., Un Voyage au Tonkin en 1688, Revue Indo-chinoise, 1909, p. 907.

（18）釈大汕、海外紀事、巻四。

（19）Voyages d'un philosophe, par Pierre Poivre, Yverdon, 1768, Paris, 1794, pp. 67～73; Gaspardone, loc. cit., p. 368.

（20）鄭天賜の名前については大南寔録前編及び大南列伝前編は一律に「天賜」と称するが、俗伝によると、天賜が家督を継いだ直後、阮主の寧王（阮福澍、一七二五―三八）より「七葉藩翰」をさづけられ、「天、子、公、侯、伯、子、男」の七字に「金、水、木、火、土」の五行相生を配して鄭家歴代の命名の標準となしたとのことである。故に、天賜は「天錫」とも称せられ、その子は「子潢」、その孫は「公楡」と命名されている。Trần-Thiêm-Trung, Hà-tiên địa-phương chí, p. 12 参照。

(21) Đông-Hồ, Hà-Tiên Thập-Cảnh, 1960, Saigon, p. 19～20. 寔録前編（巻九）は第一景を金嶼清濤となし、類誌（巻四十四）は第三景を羊山晩点とし、第十景を鱸潭漁泊となす。

(22) Đông Hồ, Sử liệu và Văn liệu về Chiêu-anh-các (1736～1771), Văn-Hoá Nguyệt-San, vol. XIV, Nos. 8～9, 1965, p. 1270.

(23) Ibid., Chung quanh sách "Hà-tiên thập-vịnh", V. H. N. S., vol. XIV, No. 7, 1965, pp. 1143～1145.

(24) E. Gaspardone 氏の「安南書誌」(Bibliographie annamite) No. 113 河仙十詠集の項では陳智楷（淮水）を陳子淮と誤読している。これは天賜序文の「陳子淮水」をよみちがえたのであろう。

(25) 紫水は甘粛省武都県東にある河水の名称であるので、これは広東省北江上流の紫洞水を指すものと思われる。臧励龢等編、中国古今地名大辞典、頁八四四—八四五参照。

(26) この鑑水は広東省茂名県の鑑江を指すのであろう。

(27) 丹霞山は江西省南城県西南麻姑山西七里にあり、丹霞洞とも称する。

(28) 海陽は明清時代広東省潮州府の府治で今の潮安であるが、この場合は北圻の海陽を指すものと思われる。

(29) 原文は霞漳となすが、これは霞浦の誤伝であろう。霞浦は福建省福寧府の府治である。

(30) 原文は維陽となすが、明らかに維揚が正しく、揚州を指す。

(31) 呉州は江西省鄱陽県の異名であるので、呉陽と称したのであろう。

(32) 銀城は福建同安県の異名であるので、銀同と称したのであろう。

(33) 通志の蘇寅道士は家譜で鄭玖に阮主に帰属することを勧めた「謀士蘇君」であるらしい。尚河仙十詠集には収録されていないけれども、阮居貞にも和韻が十首あり、撫辺雑録（巻五）に収められている。同雑録には「居貞博学能詩、在平順・嘉定屯営時與河仙総兵琮徳侯鄭天錫（ママ）以文学相贈答」と見えているので、阮居貞も天賜の詩友であったことがわかる。

(34) 福建列伝（巻三十六）には陳鳴夏の略伝として、「陳鳴夏、字雷若、惠安人、與兄如雄同登雍正甲辰（一七二四）武進士、官至江南提督」と見えているが、李氏複刻本によると陳鳴夏は明香の出身であり、号は天聞となつているので、両者は別人と思われるが、通志は陳鳴夏を福建省文人に入れているので、はつきりと別人だとは断言出来ず、今後新しい資料によつて考究されねばならない。

(35) Ngạc Xuyên, Minh bột di ngư, một quyển sách, hai thi xã, Đại Việt Tập chí, số 12, 1, IV, 1943; Đông Hồ, Sử liệu và văn liệu về Chiêu-anh-các (1736～1771), V. H. N. S., vol. XIV, 1965, No. 8～9, pp. 1264～1269.

(36) Đông Hồ, Chung quanh sách Hà-tiên thập vịnh,

V. H. N. S., vol. XIV, 1965, No. 3, pp. 1147～1150.　　Chiêu-anh-các, V. H. N. S., vol. XIV, 1965, No. 12, p. 1782.

(37) Ibid., Tác-phẩm và thi-phẩm nôm của thi phái

附録　河仙十詠

序

安南河僊鎮、古属遐陬、自先君開創以来三十余年、而民始獲安居、稍知栽植、乙卯夏先君捐館、余纘承先緒、理事之暇、日与文人談史論詩、丙辰春粤東陳子淮水航海至此、余待為上賓、每於花晨月夕、吟咏不輟、因将河僊十景相与属和、陳子樹幟騒壇、首倡風雅、及其返棹珠江、分題自述、承諸公不棄、如題詠就、彙成一冊、遙寄示余、因付剞劂、是知山川得先君風化之行、増其壮麗、復得諸公品題、益増其霊秀、此詩不独為海国生色、亦可当河僊誌乗云爾、丁巳季夏、上浣鄭城莫天錫士麟氏自序於樹徳軒。

莫城　莫天錫　士麟

金嶼瀾濤　　敢道河仙風景異　嵐堆鬱鬱樹蕭蕭

一島崔嵬莫碧漣　横流奇勝壮河仙　波濤勢截東南海　残星寥落向天抛　戊夜鯨音遠寺敲　凈境人縁醒世界

日月光廻上下天　得水魚竜随変化　傍崖樹石自聯翩　孤声清越出江郊　忽驚鶴唳繞風樹　又促鳥啼倚月梢

風声浪跡応長拠　濃淡山川異国懸　　蕭寺晨（晩）鐘　頓覚千家欹枕後　鶏伝暁信亦寥寥

屏山疊翠　　江城夜鼓

龍葱草木自（召）岹嶢　疊嶺屏開紫翠嬌　雲靄匝光山勢近　天風廻繞凍雲高　鎖（銷）鑰長江将気豪　一片楼船寒水月

雨餘夾麗物華饒　老同天地鐘霊久　栄共烟霞属望遙　三更鼓角定波濤　客仍竟夜銷金甲　人正千城擁錦袍

武略深承英主眷　日南境宇頼安牢

石洞呑雲

山峰聳翠砥星河　洞室玲瓏蘊碧珂　不意煙雲由去住
無垠草木共婆娑　風霜久歴文章異　烏兎頻移気色多
最是精華高絶処　随風呼吸自嵯峨

珠巌落鷺

緑蔭幽雲綴暮霞　霊岩飛出白禽斑　晩排天陣羅芳樹
晴落平崖瀉玉花　瀑影共翻明月岫　雲光斉匝夕陽沙
狂情世路将施計　碌碌棲遅水石涯

東湖印月

雲霽烟銷共渺茫　一湾風景接洪荒　晴空浪静伝雙影
碧海月明洗万方　湛闊応涵天蕩漾　凛零不愧海滄涼
魚竜夢覚衝難破　依旧氷心上下光

南浦澄波

一片蒼茫一片清　澄連夾浦老秋情　天河帯雨烟光結
沢国無風浪沫平　向暁孤帆分水急　趨潮客舫載雲軽
也知入海魚竜匿　月朗波光自在明

鹿峙村居

竹屋風過夢始醒　鴉啼簷外却難聴　残霞倒掛沿窗紫
密樹低垂接圃青　野性偏同猿鹿静　清心毎羨稲粱馨
行人若問住何処　牛背一声吹笛停

鱸溪漁泊

遠遠滄浪啣夕照　鱸溪烟裏出漁燈　横波掩映泊孤艇
落日参差浮罩（曾）　一領簑（衰）衣霜気迫　幾声竹棹水光凝
飄零自笑汪洋外　欲附魚竜却未能

韶石　朱璞　仁宝

一

曽聞横島極清漣　金嶼紆廻擬水仙　烏兎升沈馳昼夜
魚竜潛躍徹淵天　軽裘鎮主留題富　宿学群公続韻翩
不但日南振風雅　中州添得画図懸

二

屏山幾叠勢岹嶢（召）　翠黛盈盈自媚嬌　欲覓雲華無著迹
更妨烟景不相饒　雖多中国山川麗　亦有南天島嶼遙
未得乗風来此地　漫思嵐樹閟清霄

三

海浜禅院水雲抛　催暁鐘声百八敲　本喚高僧宣宝梵

翻驚幽鳥噪荒郊　送帰明月失林麓　留得清風繞樹梢
瘋叟三更渾不寐　眈詩狂興尚嘐嘐

四

厳城鼙鼓(鼓)擊清高　克壮軍威胆気豪　士卒殷勤邏夜月
艨艟聯絡銷洪濤　尽摭微力披金冑　定沐殊恩錫錦袍
万里炎荒征戦地　不驚鶏犬客居牢

五

是誰赤手挽銀河　洞壑雲根一縷呵　化作仙裳留霰隷
幻為仏榭観婆娑　白雲蒼狗寧誇異　廬嶽蓮峰不厭多
足補青天捧紅日　升騰大塊自巍峩

六

期飛白鷺盪紅霞　慕隠霊峰素羽斜　天外玉幢多掠影
海中珠樹乱飄花　徘徊遠渚雲拖水　潦倒閒(聞)汀月印沙
不解弋人復奚慕　野情孤潔遍天涯

七

烟波一望渺茫茫　皓魄涵虚徹大荒　万圧冰姿応合轍
千江銀影自同方　行吟沢畔心澄静　坐倚欄辺骨沁涼
勿訝素娥耐岑寂　水晶宮殿透明光

八

天開淵鑑独澄清　南浦優游最適情　蜃結楼台期旭旦
籌添海屋暮雲平　遠窺客艦連山渺　近眺漁航払水軽
謝得臨流発高詠　碧波千頃画(尽)中明

九

濃装無論酔和醒　牧唱樵歌早晩聴　野草閒花随路艶
新蔬嫩菜満園青　供親不失鶏豚倹　欵客還盈黍稷馨
時対鄰翁話晴雨　閒拖藤杖去偏停

十

残陽黯黯暮雲蒸　近岸僧堂已露燈　入港軽帆斉捲網
傍崖椰樹半懸置(曽)　携魚換酒時光宴　抱盞敲絃夜気凝
試聴漁翁酔歌妙　釣鰲海上問誰能

紫水　呉之翰　敬堂

一

拳然石控白雲辺　横海洪波断復連　繞水有情分去住
捫山為柱定洄漩　浪花出没千年樹　黛色浮沈一洞天
貢使亦知伝上国　風恬時趣往来船

二

緑雲煙銷暮還朝　峰勢迴環縦歩遙　幽壑仮眠芳草夢
碧山如画美人銷　崎嶇道転新花媚　蒼翠枝頭白鳥調
月出老僧帰興晩　一声長嘯隔青霄

三

破夢風吹到枕拗　澄澄滌慮不相淆　一声驚起鯨鯢応
三撃安排獅子哮　問性久知晨易悟　麦禅弗寐思全抛
鄰鶏管教支離唱　難敵善提百八敲

四

深夜溶溶沈虎旅　江流山月一声高　頓令塵思軽飛羽
割断雄心下并刀　四野風烟遊子夢　五更燈火素人操
鼕鼕遠払銅竜水　撃柝相随豈憚労

五

半空石竅独巍峩　旦暮山頭変幻多　有影離迷連鹿峙
無心出入繞竜窩　朝蒙五色移仙杖　夕覆千層獲女蘿
羽客多情方便寄　貴人能得幾回過

六

霊岩碧削行人少　白鷺穿雲瀉銀花　健翮欲凌滄海月
潔身曽晩(晩)碧山霞　貧飛古洞棲猶晩　想浴天河夢更遐
迴首幾回天際外　秋深踪跡満蒹葭

七

似湛清虚白玉堂　東湖風景恍瀟湘　到無水処歌横槊
会入心時酌巨觴　両鏡鳳盤秋夜永　一珠竜抱水天光
蘭橈未敢猖狂弄　太白精魂正渺茫

八

浦占南離斗指庚　風波不動海雲生　澄江弗界紅塵恋
緑水還同処士清　一片寒光心洞白　中流寂静月痕明
千尋綱練何難写　為報明君恨已平

九

孤峰突兀色恒青　遠控深林作画屏　学得老樵為旧業
聊将蕉樹護疏櫺　雲間鶏犬休嗔異　洞裏烟霞没却形
白鹿麒麟芳草地　閑将幽思著心経

十

鱸溪溪畔是岡陵　漁板浮沈断続層　両岸蒹葭招鷺立
一江秋水倩誰凝　天高望遠搏雙鯉　海闊情深寄大鵬(?)
児女一竿孤月下　不須蓬引度昏燈

南海　李仁長　元宝

一

穏向南溟障百川　芳洲撈出霧中連　憑陵金鎖馴鯨鱷
激射銀花蔟蜿蜒　動以静閑因定力　虚惟実馭得深権
盤迴嶽立成綱紀　俯自朝宗仰捧天

二

若為渲染此岹嶢(召)　幅幅千(于)雲絶俗標　巫女参差堆緑綺
媧皇行列貯青瑤　坂眠兕犢春如覆　穴蓊鬱雛秋不凋
雙眼已懸狂大阮　濃花幽草好墊腰

三

撞破鴻濛一気交　冷然幡外遇松梢　壑竜乍醒月孤落
林鶴初飛星乱抛　了悟道心非朽蠹　翻憐世事似懸匏
景陽動処催宮漏　囂寂何曾相混淆

四

宵分点点度波濤　清応寒空水一篙　雷電豈須同奮迅
蛟竜曽篇悉逋逃　肯将辱士披単絞　覚有羈人変二毛
郭外岸連喧社火　警蹕安亦不忘労

五

漩房誰佈向山河　納尽氤氳飽太和　蒼狗白雲(衣)含処大
恵雨甘風吐薫多　投閑却得根源地　耐淡終成安楽窩
開鑿巨霊貪亦似　五文今古恣包羅

六

的爍流光白日斜　枝棲恰可借為家　已迷鷹視雲峰側
仍傍鷗鄰烟水涯　練羽倦垂随墮葉　銀毫紛掠繞飛花
祇応物色鮫宮外　良馬従来跡最遐

七

西逝神鳥影没黄　太陰流象接扶桑　害冰候発融無滓
奩鏡随開散有芒　消長黙符微子母　欠円迭譜肖圭璋
木公応寄波臣靖　人掬重輪夜未央

八

派従分処位離明　迤邐長堤曲岸行　心地匯通難壅濁
性天涵澈易揚清　藻揺桃簟浮文彩　莎擁蘭舟濯素纓
昭代薫風吹匝底　介鱗俱在化機呈

九

鱗鱗衡宇不重扃　淳古人依古翠屏　隴背露繁桑葉嫩
圳頭風細稲花馨　耆年習漢称三老　童塾宗周誦五経
得失酔来蕉夢破　豕園難桀夕初冥

十

試問松江得似曾　一湾容穏放簑籐　浮将家室謀寧拙
清与児孫産亦憎　脱粟換余堪博酒　断蘆焼剰可張燈
同羈無蒂乾坤内　(尊)蓴菜空教憶季鷹

鑑水　単秉馭　石亭

一

不做秦王一著鞭　蒼蒼山色自年年　横流独握波濤勢
半壁能司造化権　万里晴光浮暁日　四囲寒気薄嵐烟
風帰孤島声常寂　壮麗河仙控海天

二

芙蓉高削出雲霄　環列如屏入望遙　一画山光横翠黛
幾重雨気漲紅潮　風来石罅青常染　霞至苔痕緑未消
愧我十年雙屐折　浪遊突笑老塵囂

三

夢醒虚窗啟翠拗　蒲牢百八寺中敲　冷冷霜気四辺粛
鹿鹿塵心一夜抛　鳥語纏綿浮屋角　湖光蕩様出林梢
年来久負山僧約　未得誅茅共結巣

四

宛似鼉鳴出海濤　逢逢响徹月輪高　未催金殿朝容粛
独鎮江城宇気豪　沙漬鷗驚眠雪浪　楼頭人感読離騒
若教飛入春園去　一夜光開解鬱陶

五

何年怪石倚嵯峨　乱窟幽深孕太和　蒼狗静涵留碧戸
丹蛇動繞隠青螺　悠揚天地形多幻　呼吸山川翠一窩
未化為霖蘇百物　浮生休笑老巌阿

六

極目珠岩興独賒　碧天群鷺影横斜　数行飛破溪山雪
万点軽浮蘆荻花　風繞素絲涵玉体　雲標高格印銀沙
寒塘若得同為侶　声価増来日未涯

七

雲淡烟消夜気涼　水天遙接色微茫　涵空静瀉冰壺影
歛艶低涵玉鏡光　鮫室照来皆錦繡　鷺濤飛去尽文章
湖心恰似明珠浴　一片精華徹万方

八

笑指中流似鏡明　瀠洄南浦足娯情　微鋪白練涵秋色
静浥寒光湛暁晴　碧入魚竜潛有影　徹来天地寂無声

風恬両岸帰元化　蕩漾長空一気清

九

漠漠村烟繞翠屏　結茆鹿峙背沙汀　風吹麦隴千層緑
雨過苗田一片青　摂髪毎朝臨曲澗　看山終日倚疎櫺
詩情多向黄花発　酔飲東籬月未昇

十

月印鱸溪緑化冰　一湾流水浸魚燈　蘆花雪重籬沙渚
楊柳烟深鎖釣藤　竹笛吹残声幾点　江波飛入影千層
無辺山色挹帰夢　風景依稀似武陵

番禺　王昶　日永

一

鰲背芙蓉鎖翠烟　夕陽人立思悠然　誰移東海三山石
自砥南溟一掌天　裁断水痕潮有信　撼残風力浪無権
書生独抱梯航志　空対文瀾枕硯田

二

春深螺黛倩誰描　不老山容色自嬌　雲帯海烟青到岫
江呑崖樹緑帰潮　珊瑚市近連朱戸　翡翠洲横接碧霄
我有詩心無処托　直従天外寄情遙

三

景陽三扣遠蓬茅　百八声寒曙色交　人証禅心帰丈室
蝶催塵夢醒花梢　沈沈透月霜同応　点点寒風漏並敲
想到仏燈明滅処　莫驚残月落堂坳（拗）

四

声沈天半応江皐　三撃漁陽豈罵曹　扣石世伝桐木古
催花人立女牆高　風前響答更籌転　枕畔情関客夢労
方叔擬来河未入　月明芳甸写牢騒

五

山光四面雨初過　五色翻従吐納多　豈為石郎開歩障
却疑神女作行窩　蘊将錦繡帰霊竅　闘破鴻濛養太和
花飽艶情天不管　一春啼鳥隔巖阿

六

莫矜宿処聚円沙　立向珠巖夕照斜　声動一行驚石耳
影翻千点失蘆花　求魚恋恋臨江岸　刷羽蕭蕭傍水涯
世路任教弾射遍　野情長結老漁家

七

不分月色与湖光　秋水冰冷自一方　明晦自従清濁弁

欠月誰向浅深量　鏡開洛女初粧罷　珠泣鮫人夜正長
料得魚竜眠処穏　漫労香餌釣滄浪

八

一鏡風恬浪不生　烟消雲斂接天清　聖人有道昭明世
嬬子無心解濯纓　飄泊静分萍梗跡　往来閒(間)煞鷺鷗盟
中流欲譜瀟湘曲　香浸桃花両岸平

九

郭外安居地亦霊　三春門対稲苗青　桑麻得処生芳圃
雞犬忘機立翠屏　落葉閒庭無過客　雨晴深巷有流螢
子孫独計田疇富　耕鑿労人日未停

十

借問桃源到未曽　蘆花開処一層層　環溪月黒沈魚板
依岸舟横点水燈　天遠客誰問短笛　夜長人自補方罾(曽)
巨鰲不餌南溟釣　閲尽烟波総莫憑

古閩　方銘　元運

一

汪洋満目別清漣　力制狂瀾仗石仙　万派有権能動地
一拳無恙直撐天　竜潛恰好資酣睡　鵬起虚疑礙遠翮
砥柱千秋鯨鯢息　年年喜見客帆懸

二

巨霊作意列召嶢　無恨籠蒐弄色嬌　六曲烟飛岩樹古
千重莎払海風饒　乍驚図画工都化　更覓蓬壺路不遙
安得赤桐臨絶壑　幽蘭緑水写情簫

三

信是闇黎万念抛　疎鐘幻裏及時敲　一声向曙流孤島
余響牽泉散四郊　逗砕塵心帰浄宇　催残鳥夢勤寒梢
梵音此際意何恨　厭雑山家鶏乱嘐

四

棚関旗払暁雲高　雉堞鳴鼉気倍豪　風伯遠喧傾斗渚
馮夷潛聴伏波濤　柝(折)循更数偃蓬漏　霜挾撾声厭草袍
海甸粛清猶警夜　可知専閫会持牢

五

長開洞口若懸河　満吸雲従遠岫呵　静護丹炉常滑膩
暗随竜影並婆娑　堪誇蒼狗仙家富　不羨巫峰夢裏多
好是無心供一飽　尚余片片度嵯峨

六

相喚林塘触暮霞　頂絲飄動逐風斜　一行空際垂霜毳
数点岩端華玉花　青草細烟多晩霽　碧山寒蓼老青沙
同心同調選同潔　豈此鴛鴦眠水涯

七

湖景果然佳夕最　冰輪倒挂徹洪荒　影拖菱藻風多態
色演蒹葭水一方　竜詫晶宮珠却似　兎摹波窟魄応凉
賞心何必泥真幻　上下分明一式光

八

両岸青苔風色清　漣漪真是動騒情　紫鱗噴処数行綯
碧練鋪来一片平　未許買将烟水好　祗期乗個画橈軽
波霊似会閑観意　更引斜暉徹底明

九

幾家籬落意醒醒　遶屋流泉不厭聴　岩狖揉偸簷果熟
竹禽翩引浦雲青　瀑声迸碓春遍急　杏影揺帘酒倍馨
緑野月明無犬吠　浪遊喜向問居停

十

蘸波峰影暁稜稜　明滅夢陰幾点燈　酸後鷗睃沙際笛
夢余風攪月辺曽　家浮黄筏高懐寄　春満青簑笑口凝

贏得一竿問世界　釣璜遺事敢云能

陽羨　路逢吉　星来

一

一派奔流拍遠天　狂波直欲捲春田　雲環疊岫魚竜隠
雨洒重巒紫翠鮮　喜藉緑屏周沢国　全無碧浪擾民廛
縦教瀚海雄風猛　砥柱惟憑障百川

二

竜従秀色鬱迢迢　極目美蓉入望遙　万簇雲峰凝碧影
千重鷸羽欲冲霄　晴懸碧障光浮動　雨滌青螺態愈嬌
劉阮莫教思採薬　空山誰復報瓊瑤

三

一声声响出青郊　長逐荒鶏起草茅　驚醒離踪魂欲断
傷懐孤帳涙潛抛　塵心未淨凡情雑　俗慮銷完道念交
祗恐回頭成意馬、　空煩午夜老僧敲

四

淵淵夜永起江皐　砥競哀茄繞客艘　蓬漏未教随水転
銅街常向静時遭　不帳(?)陪依玉刀斗　長対寒波倚雪濤
拆砕漁陽零八弄　露融衣袂興偏豪

五

纔看膚寸合嵯峨　忽忽崔嵬簇翠螺　霧掃烟嵐呈黛色
風廻霧斃入岩阿　虛中有受真天賦　雅量含弘識太和
多少浮雲俱斂尽　此中応号白雲窩

六

誰将玉屑点含牙　界破青山散影賒　惝怳懸崖垂舞浪
依稀寒日綴霜葩　紛紛砕剪寒初墜　杳杳驚看月到沙
瑞雪廻風光焜燿　蹁躚泉石喜横斜

七

一輪蟾魄下銀塘　万叠金蛇燦遠光　掬処宛看攜玉鏡
深沈如晤解明鐺　鈎同屈鉄留清影　点似冰球耀紫芒
恍惚蛟宮驚夕照　姮娥知整晩時妝

八

寂寂洄瀾似鏡平　方偶恰喜近離明　常因繡屋臨開爽
遂啟明堂鑑水清　渺渺淵淳光斂艶　溶溶静澈遠回瀠
人心若与晶瑩比　善鑑輸他万頴成

九

傍水依山四望青　千家守望地能霊　朝攜畜産趨村市
夜聴鶏鳴候暁星　牛背笛声知牧子　籬辺犬吠識畦丁
桑麻人物歌寧謐　喜遇邦家際輯寧

十

林高木古鬱層層　掩藹波光緑倍増　葉脱日来宜晒網
原寛風爽且収曾(曾)　傾觴不第魚邀客　野唱還招月作明
逝者如斯誰計挽　敢教為楽譲才能

丹霞　徐叶雯　子章

一

海湧奇峰障碧天　東南砥柱障河仙　勳開沢国風波静
力圧鯨鯢日月懸　黄鶴高楼澄錦樹　貢帆遠渡破晴烟
遙聞利渉無驚険　長見星懸照大川

二

層巒列笏向南朝　翠落長江水欲飄　万壑晴明当戸牖
一城錦繡入雲霄　烟開黛色禽声砕　閣隠嵐光暮靄遙
白雪陽春歌不老　天然図画筆難描

三

幾点疎鐘夢裏敲　微茫月落曙光交　輪廻刦去三千度
撞破愁人万事抛　法海光明呈暁日　梵音清徹起潛蛟

由来浄境帰空寂　悟却晨昏自解嘲

四

夜静更厳鼓角号　軍門整粛壮竜韜（韜）　驚伝剣佩千霄遠
奮起魚竜叠浪高　窮谷謳歌伝旧業　一方保障沐新膏
誰知外海昭王化　始信長江飲馬豪

五

雲翻石壁影婆娑　吐納氤氲妬薛蘿（辟）　五色文章光上国
千層玉葉結深窩　升騰有待春風暖　変幻無窮夏日多
未許従竜行雨去　凝華散彩壮山河

六

珠岩飛出鷺鷥斜　掠水機忘一片沙　碧樹帯雲棲影淡
瓊崖依藻落声遐　軽飈暗度蘆花白　蕩漾清留月色賒
素有高懐志未逮　秋風振羽到天涯

七

両岸暗明接大荒　蟾宮忽落水中央　長江如練浮金鑑
遠浦横空入画航　蓬鬢莫嫌雙鏡暁　素心清似一湖光
放懐且伴嫦娥酔　漫向竜津剣気芒

八

秋水連天一片晴　蘆花頭岸影軽盈　風揺銀練千層碧
月照金波万里明　赤道祥光浮沢国　煇煌佳気満江城
于今聖代称神化　喜見河清海晏呈

九

古道安居在徳馨　遙聞鹿峙地鍾霊　岩雲去住当皆白
岸樹参差映水清　謾説山川成異域　還教海国作来庭
賓歓礼法歌王化　吏不敲門戸不扃

十

夕陽西墜月東升　漁泊鱸溪集旧朋　曲岸荒村沽美酒
黄童白叟話寒燈　間吹短笛情無限　酔和高歌興不勝
臥看客星銀漢上　一湾垂釣学厳陵

韓江　林維則

一

屹立峭嶢倚碧烟　中流砥柱古今伝　鯨波未許横坤軸
玉馬難教混海天　沢国靖寧千艘便　山川廻抱万星懸
鍾霊海外生奇島　来往人欽鎮守賢

二

層層常郭出青霄　無限風光散寂寥　雲樹入欄開錦綉

烟光如画展絞綃　終南毓秀人難擬　華嶽鍾霊地亦饒
野馬満途飛不到　携笻応許狎漁樵

三

蕭蕭古刹出西郊　午夜疏鐘夢裏敲　撞破迷途心已悟
喚醒塵世物初交　悠揚迴出珠林外　清徹飛回渤海坳
残月斜懸星幾点　群鶏驚起乱嘐嘐

四

一島孤懸設険労　幾声夜鼓振波濤　錯疑天際春雷奮
驚起城頭海鶴号　刁斗森厳霜共凛　閭閻寂静月初高
擁襟細聴更籌転　遙想将軍気象豪

五

玲瓏古洞鬱嵯峨　引得行雲結一窩　祗為無心頻出岫
那知有意湧成波　従竜易見為霖雨　触石寧甘恋澗阿
竚看九霄帰変化　繽紛飛去浣明河

六

珠岩白鳥易為家　飛落行行掠影斜　適意自多求細藻
閑心豈厭立円沙　風飄雪雨層層玉　日照霜翎片片花
却笑鷗群盟去後　高楼何似楽烟霞

七

一泓如練宛瀟湘　蕩漾金盤夜色涼　却訝広寒帰浩渺
豈知皓魄入微茫　菱花養水難求影　太極涵虚静拖霜
豈是嫦娥嫌寂寞　故来波浪浣明粧

八

水光如錦四時平　春日融和浪不驚　自是海隅南浦静
応知華夏聖人生　鳥飛上下渾流影　気満乾坤不礙明
罷釣漁舟帰唱晩　笑酣頻指一江清

九

白雲深処結茅亭　占尽烟光草木青　日暖帯雲鋤遠浦
春和乗雨佈良町　屋環緑水為池沼　戸納丹山作画屏
試看古来明哲者　多栖幽谷養虚霊

十

滄江一曲尽懸罾（曾）　柳樹溪頭露気澄　機事不生漁海夢
蘆花難隠破篷燈　清風明月為知識　緑水青山作友朋
相対一声歌欸乃　酔眠不覚日東升

古閩　徐鉈　景猷

一

作鎮功成勢屹然　江干雄拠奠河仙　堪称砥柱為瞻仰
豈有波濤暗欲連　碧海長流銀漢外　斜陽返照翠嵐懸
徘徊盼望山川景　不尽風雲万里天

二

一峰高出一峰遙　万叠如屏翠色饒　海霧未収樵径湿
晴嵐飛尽緑烟飄　城頭列障開図画　天外鋪霞入綺霄
鹿谷遙観誇壮麗　夕陽深処駕紅橋

三

海国高僧結草茅　潮鶏初唱暁鐘敲　一輪斜月侵禅大
幾点疎星醒鶴巣　自有法台帰大海　由来老衲繫空匏
朝朝島外蒲牢応　廻首人天夢正抛

四

逢逢海外数声豪　玉漏初長振六鰲　鎖鑰令厳諸島寂
雷門人聴四天高　防閑易壮関河気　設警寧忘沢国労
最是三更眠不穏　城頭飛落応波濤

五

三映鬟鬟起嵯峨　五色無心結一窩　懶去従竜帰海国
間来触石起烟蘿　未甘出岫飛巫峡　有意帰山蘊太和
寄語封家十八妹　且休吹散乱婆娑

六

秋江蕩蕩鷺鷥斜　飛落珠岩傍水涯　聊借沙隄鋪玉雪
更憑洲渚叠梅花　欲翔琪樹雲猶遠　思啄銀河路尚賒
向晩更求魚沙際　迎風振羽払烟霞

七

湖空魄皓雨当央　洞徹山川万里洋　一色接連天即水
雙娥相対鏡流霜　江妃鼓瑟開澄練　竜女擎珠出夜光
四顧無雲風寂寂　好散上下奏霓裳

八

虹銷雨霽露初生　南浦波晴見太平　風掃海氛澄沢国
天開銀練映江城　光空碧落窺竜戸　遠徹南溟現水晶
記得滄浪孺子曲　清清可以濯吾纓

九

鹿峙村深得自寧　閑来無事釣江星　忽聞笛返吹牛背
又見松梢出鶴翎　莫謂寄身居地僻　誰知翹首挹天青
詩成酒後清宵興　笑枕溪山作画屏

十

日落烟低遠渚凝　漁舟帰泊隔江燈　網懸夜月波生眼
路似松江樹幾層　露液汲来炊旧飲　蘆花燃尽煮鮮凌
酒酣欸乃歌声起　又逐秋風入武陵

竜溪　林其然　若之

一

六鰲駕海壮大淵　独峙東南勢屹然　万古山霊分海色
千年砥柱奠河仙　高撑巨浪千層雪　静圧廻瀾万道泉
我亦梯航来此地　須知造物有衡権

二

春風淡蕩雨烟調　列峙重重藹碧霄　古樹垂陰雲度影
層巒積翠瀑生橋　山容到榻供清賞　草色帰簾破寂寥
大塊鍾霊開幕府　軽裘緩帯独逍遙

三

梵宮残月挂松梢　遠聴晨鐘帯月敲　百慮倶従花雨散
万縁偏向水雲抛　漫洿海国堪開偈　頓欲山僧静結茅
信歩行来衣露冷　紅雲早已出東郊

四

棚城雄拠接江皐　譙歌頻催将令豪　夜静辺防消夜警
更闌渤海息洪濤　楼頭遠近迎風急　枕畔高低入夢労
独羨庾公憐夜月　不将声嘯喚旌旄

五

嵯峨高立闘雲窩　幽壑雲帰吐納多　莫道無心穿石洞
豈因為雨隔天河　未経舒巻従竜変　且作氤氳出岫過
応是地霊抱清潔　白雲(衣)蒼狗待為何

六

寂寂珠岩傍水涯　飛来白鷺御風斜　乍疑南国春猶雪
更認平堤柳尚花　有意求魚臨葦藻　無心倚玉別蒹葭
優游飲啄忘機事　愧殺秋鴻掠遠霞

七

微茫素影蕩湖光　倒挂楼台夜気涼　白璧無瑕懸碧落
明珠有涙墜滄浪　凌波玉女磨金鏡　逐世飛瓊酔羽觴
我欲乗槎摘星斗　蛟宮間看舞霓裳

八

秋光浙浙露華軽　南浦澄波到底清　雙燕掠来全見影
群鷗帰去寂無声　烟開貝闕涵霜鏡　天浸琉璃隠碧城
万里貢帆飛去疾　猶如列子御風行

九

村居聯絡在郊坰　鶏犬桑麻総地霊　一曲溪流田護緑
幾重山翠闔排青　夜寒剪竹聞機杼　春暖荷鋤帯月星
鼓腹也知歌帝力　時将忝稷荐芳馨

十

日暮江間漸挂罾（曾）　鱸溪深処碧澄澄　得魚潑刺頻沽酒
吹笛凄清更喚朋　椰樹緑篩篷外月　蘆花白隠水辺燈
船頭遮莫聞鶏犬　誤把烟波作武陵

丹霞　陳惟徳　自俊

一

屹然海上鎮河仙　不許群峰一石連　遠截狂瀾為虎踞
高擎雲漢若星懸　採菱掉返維低岸　釣月帆帰過別川
雅頌晏清多利楽　千秋砥柱壮南天

二

数峰拔地列重霄　連絡屏開景色饒　暮借雲霞鋪錦綉
朝憑花鳥写鮫綃　青遮北海層層峭　香障南天叠叠遙
添得詩情多逸趣　倚欄難尽意中描

三

何処鐘声逼暁敲　細聴蕭寺隔江郊　明明落月翻鯨浪
隠隠軽風醒鶴巣　撞破利名千里夢　喚回竜象一間茅
真如会得帰無著　回首紅塵路可抛

四

江城夜鼓静声高　守令遙知気象豪　点点暗醒鮫室夢
逢逢驚起禹門濤　漁人信宿歌閑月　壮士驕眠解佩刀
四境不驚安衽席　将軍経世擅竜韜（韜）

五

石洞呑雲蘊太和　氤氲高許秘岩阿　虚霊貯得文章満
出没含来雨露多　竚待九霄扶日月　惟将五色補天河
人間変態如蒼狗　且看為衣挂薜（辟）蘿

六

晴巌一面枕江涯　白露帰飛落彩霞　頡頏雪衣渾綴玉
翩躚珠樹白成花　横排呼侶帰瑤島　班立求魚趁月華
直欲高楼崗鶴伴　蘆汀寧譲九霄遐

七

碧天雲淨月華凉　影落東湖上下光　波漾玉盤寒歛艶
水涵金鏡冷蒼茫　明珠雙走驪竜窟　桂樹寒生水殿鄉

料想嫦娥嫌独処　故来鮫室理霓裳

八

爽気浮空万里晴　海隅風浄碧波清　魚竜倒影琉璃見
楼閣含虚蜃気呈　落照茫茫舗白練　晩涼湛湛息長鯨
欲携斗酒問朋好　泛泛蘭舟載月明

九

蕭然鹿峙結茅亭　称得幽居養性霊　童去掃花門未啟
客来問字酒初醒　樹間鳥語催詩思　石畔泉流傍月聴
聊且栖遅非遁跡　柴扉雖没不曽扃（会）

十

孤蓬占尽一溪澄　与世無求免愛憎　緑樹陰中横短棹
斜陽影裏晒疎罾（曽）　興酣潦倒簑為席　臥唱滄浪月作燈
且欲明朝浮宅去　載将樽酒訪厳陵

海陽　鄭蓮山　如佳

一

截断狂瀾一島懸　中流砥柱護寒烟　横波未許当心湧
白馬休教与岸連　帯礪山河分異域　屏藩海宇峙同天
日南於此称奇勝　不負採奇到客伝

二

疊疊峰巒黛色饒　翠光環繞接雲霄　屏開十幅烟嵐写
樹抱千層暮靄遙　寺裏天光随雨落　楼辺蜃気入城飄
疎狂許下陳蕃榻　臥対山頭看晩潮

三

養性只宜静裏教　省心当聴寺鐘敲　声声撞醒三千界
寂寂驚来百八抛　鯨浪帯風沉島月　金鳥催日出僧茅
欲知夢幻当前覚　一気輪廻曙正交

四

一声傍夜起江皐　響徹雷門沢国豪　虎帳有刀曽換犢
柳営無土不流膏　更闌点点厳孤島　夜静声声振六鰲
千里雄風人独立　楼頭光徹将星高

五

奇峰不信夏能多　霰霧平空結一窩　呼吸到天通帝座
往来随便巒岩阿　呑残天地精華気　譜出蓬莱五色歌
万里飛帰呈錦綉　従竜消息又如何

六

朝飛天漢披銀彩　暮向珠巌弄晩霞　野性無心栖海島

幽情有意集蒹葭　求魚呼侶雲中遠　刷羽斉鳴雪裏斜
華夏漫労歌出鼓　夕陽流影在蘆花

七

彩雲飛向玉盤飃　映徹東湖入夜長　上下水天同一色
高低河漢総流霜　臨風竜女新開鏡　泣涙鮫人出夜光
不用梯繩窺玉宇　波間白是広寒郷

八

水接東湖開夜月　波澄南浦繞江城　黄河已見微期会
黒海遙知応聖明　遠鑑江中鮫室見　聞吟沢畔水天清
魚竜呑吐波能静　万頃深涵徹底明

九

山開茅屋数峯青　辟却囂塵養性霊　雲水千重迷曲径
詩書幾巻対窗櫺　泉声遠合春声響　蕉夢応同鶴夢醒
耕鑿優游聊鼓腹　高眠不管日穿扃

十

漁湖一片月初升　閑集鱸溪水鏡凝　托跡漫教同呂尚
放歌聊見效厳陵　江湖不負絲綸美　挂棹那知寒気蒸
斗酒自労忘白髪　海鷗無意学飛鵬

霞浦　徐登基　常五

一

巍巍独立水中央　雄峙東南障百川　遠奠風濤帰九曲
静観海晏到千年　功成砥柱長江鎖　気壮鯨波万里烟
驚怯蛟竜皆遠徒　永懸日月照河仙

二

群山高聳碧雲霄　羅列如屏紫翠饒　樹密函天青展蓋
雨余半壁緑垂条　烟迷遠岫青林見　霞落長空石室遙
培得桂芝千年秀　歌声迢遞起漁樵

三

疎鐘野寺五更敲　催落残星夢正抛　声発鯨音聞海甸
韻流碧落動林梢　山僧夜誦完三蔵　估客晨占起六爻
喚醒迷途驚睡覚　忽来窗外曙初交

四

南国催花夜興豪　一天寒気遍江皐　漁陽撾出三更月
鼉吹驚飛五夜濤　声落城頭鳴剣佩　响窮化外粛弓刀
山空海闊烽烟息　好向譙楼抱枕高

五

精華豈是閟岩阿　石室含虚抱潔多　呑吐半籠天上日
繽紛全挂洞中蘿　乖竜息影終難鬱　夜鶴無心毎共過
挙目為霖終有待　蓬萊深処又如何

六

一行斜看下澄沙　不信珠岩玉有瑕　艾嶺乍疑梅吐蕚
屏山誰見鷺飛霞　乾坤托足非無地　烟水忘機豈有涯
黄鶴早知帰有路　久抛楼閣到仙家

七

空明水月共揺光　俯仰湖山興欲狂　波浄倒懸天上鏡
珠円寒走浪中霜　霞溪亦有青雲夾　珠海非無徹夜長
但挾素娥迎仙窟　乗槎一問広寒郷

八

中華遙聴頌河清　南浦頻看徹底明　万里貢帆軽颭水
一江楓葉落無声　蜃辺楼影開冰鏡　鰲背霞光映赤城
欲向九州窮禹蹟　滄浪歌罷濯塵纓

九

鶏犬声中構草亭　峰峰飛入戸常青　柳辺煮酒添鱸膾
蕉底探泉験水経　竹杖挑雲帰野老　鮫鮹織霧响閑庭
無聞但使桑麻在・一映人間夢未醒

十

扁舟不逐晩潮乗　泊向溪頭緑水澄　沽酒断流因得膾
推篷留月正懸罾　風波不老蘆辺夢　鷗鷺同眠渡口澄
我亦持竿居別島　欲将簑笠結良朋

韓水　湯玉崇　放菴

一

浩渺滄溟貫百川　崔嵬金嶼接雲烟　中流砥柱(極)狂瀾息
半壁河仙地岫円　貢艦往来因利渉　風帆噴薄總無権
生成勝概千城固　海不揚波億万年

二

画図面面絵生綃　半映平蕪平映湖　濃淡層巒青抱郭
参差青樹緑通橋　烟霞出自屏藩秀　山水全憑筆墨描
南国地霊風景異　満林出鳥弄簫韶

三

禅機初動五更交　竜象当前静裏敲　寺僻雲封僧夢覚
音清風送俗塵抛　蒼松応响驚栖鶴　幽壁聞声起舞蛟
淡月疎星天欲曙　飛禽嘹唳出林梢

四

逢逢入夜徹江皐　响応關前擊柝勞　細柳営中厳鎖鑰
棚城悵下肅英豪　南天徳化銷烟警　北海波恬靖海鰲
最喜昇平人楽業　家家買犢尽蔵刀

五

紛紛如蓋吸岩阿　一気氤氳繞薜(辟)蘿　為再未帰神女夢
随風疑是蟄竜窩　閑飛五色成蓬島　散作千盤繞翠螺
勝地不登非逸客　枉将彩筆瀉天河

六

黯黯残陽落影斜　一行班立在晴沙　暁随玉浪思謀食
晩向珠岩便作家　栖止羽毛鋪朔雪　翺翔絲頂散天花
優游並処漁翁侶　同在江湖度歳華

七

宝鑑高懸漾碧光　涵虚清澈影微茫　雲開竜戸鋪澄練
風静蛟宮舞霓裳　不向瓊楼聽白雪　空贍玉杵搗玄霜
東湖若近瀟湘処　夜夜遊人不断航

八

乗興扁舟一葉軽　閑過南浦水光瑩　交枝入網珊瑚現
重疊乗潮玳瑁明　海口奠安歌海晏　河仙寧靖頌河清
謾言献瑞無徴験　先兆中華万載清

九

巧択山居得地霊　烟村輻輳倚雲屏　岩前野鹿尋蕉緑
岸畔耕牛覓草青　税賦免徴人常足　差徭無慮住安寧
沿溪若映桃花樹　漁父迷津認武陵

十

鱸溪溪水水澄澄　欸欸漁舟泊幾層　江上羨漁思結網
船頭吹笛冷含冰　閑登岸舎沽村酒　自友蘆烟拉友朋
一酔不知天地闊　扣舷歌罷興加増

肇豊　潘天広　錦江

一

潮落雲根対影円　依稀宮闕降神仙　崇湾湧截波濤静
大壑深移樹石懸　十二名山環翠壁　三千海国奠清漣
凭凌水界紅塵遠　突兀(屹)中流一柱天

二

春靄千里似水飄　屏山如画総難描　黛痕縹渺拖雲緑
樹影参差到閣饒　空翠虚涵佳気麗　晴嵐軽染物華嬌

巍巍独峙棚城上　晩対烟霞矗漢霄

三

古刹蕭條曙色交　疎鐘次第韻初敲　風生竹院鳥啼樹
月落松窗鶴出巣　百八寒声醒旅夢　大千滄海起潛蛟
扣残五漏義輪上　照徹乾坤太極包

四

漠漠烟江擊夜礬　霊鼉吼水一宵労　鳴声鶴唳辞珠樹
動処竜帰化錦濤　更永响流山月溪　風伝寒徹浪声高
逢逢不用厳軍令　四海無驚解戦袍

五

飛帰触石便成窩　吐納氤氳又若何　有意従竜帰去住
無心出岫共婆娑　岩前変化風雷少　洞裏乾坤雨露多
最是四時頻点綴　玉泉乳竇養天和

六

春鈿結侶掠雲霞　飛落霊岩就浅沙　絶壁烟光鋪瑞雪
一群風動襯梨花　翻中淨捲銀鈎上　集処閑依藻鏡斜
遙望半空宜物色　青山白髪擬仙家

七

一輪飛落白蘋鄉　澄徹銀湖夜色凉　万頃浮金溶渺渺
千尋耀碧映湯湯　水晶宮裏霓裳静　白鷺湾頭桂樹長
欲共乗風閑泛棹　恐驚宮女弄珠忙

八

虹銷南浦海雲晴　斂艶涵虚混太清　波底魚竜文彩見
空中貝闕錦漣呈　蓼花泛泛淘烟淨　杜若依依蘸影明
風淨波光開水鏡　晩帆帰去数舟軽

九

高低村舎樹為屏　柳岸榔園湧翠青　鹿返尚遺蕉葉夢
人為閑閉野雲扁　岩巒瀟洒樵歌歇　畎畝逍遙牧笛停
海国有天饒勝概　物華時発地鍾霊

十

鱸溪幽折水清澄　隠約斜陽理釣罾　蘆荻叢辺花似珥
蒹葭秋際月如燈　推篷吹笛招黄鶴　倚酔閑眠結鷺朋
燕尾臨流長泛宅　羊裘終古憶厳陵

竜溪　陳緒発　倩夫

一

霊鍾海外独峨然　遠鎮滄溟万古天　玉馬声高断還続

鯨波勢勁亦廻旋　嵐清尚抱千秋月　浪静頻招万里船
銷鑰竜潭来往便　応知砥柱至今伝

二

天外群山簇翠翹　一重高出一層霄　終南佳気応嫌浅
華嶽晴光毎見饒　潑墨正堪図秀麗　求仙長得狎漁樵
江城半遶無偏向　万古屏藩帯礪遙

三

凌晨声似叶笙匏　何処疎鐘風外敲　咒鉢毒竜初出定
依雲孤鶴已離巣　預知方丈宣三乗　早喚南窗読一爻
搔首簷前無所事　驚看斜月下松梢

四

偃武亭前暫息労　帰来各自挂弓刀　一声鼓奠臨江渚
五夜威厳払羽旄　虎帳春深鼉起躍　譙楼風定月初高
須知法外昭文徳　好助成詩奪錦袍

五

碧削孤擎衣薜蘿（辟）　玲瓏空洞傍岩阿　地分巫峽神竜会
脈接崑崙瑞気多　毎見四囲皆靉靆　平呑五色更婆娑
羅浮聞説飛雲洞　玉葉金枝較若何

六

珠岩如借鳥為家　空洞晴依活水涯　古逕直連高峭嶺
甘泉偏出浅流沙　蘆叢宿去緑無地　玉樹棲来自有花
霊谷幾時同策杖　行看班立自横斜

七

東湖別是一瀟湘　月印波心夜色良　蕩漾鮫竜珠女現
澄明玉鏡水宮光　庾公楼上看何似　太液池頭玩未長
何処扁舟人中酒　吹将仙管動霓裳

八

河仙南浦自天成　一派波光分外清　洛水豈同学卦象
滄浪不譲濯冠纓　魚鱗踞岸看猶徹　斗柄乗舟摘亦平
海気涵処長弗変　応知此地有賢明

九

短籬疎密間茅亭　麋鹿春帰別一坰　翳木留陰藜杖老
新畬呈秀酒炉馨　猟禽転入深山路　釣鯉還過傍海汀
栄辱不関機慮息　従無需索到岩扃

十

墨突清溪罷網罾（曾）　鱸魚肥美酒銭増　沙鷗欲恋忘機慮

汀鶴如知旧友朋　白昼随流恐短棹　黄昏傍岸列疎燈
浩歌一曲穿雲去　驚起竜翻浪幾層

同安　黄寄珍　席侍

一

突屹中流一島円　地鍾霊異奠河仙　水流雲漢潮来急
脈接屏山勢欲連　遠海波揚従此息　長江浪湧更難前
坤方坐鎮為関鎖　万里棚城別有天

二

層巒迢遞接雲霄　幅幅如屏尽裏描　喬木倚春呈錦綉
名花擎日献嬌嬈　入城黛色青為海　上閣嵐光緑漲潮
山水日南饒勝概　遊人乗興不知遙

三

疎鐘百八静中敲　起視銀河浸柳梢　傍岸漁舟猶寂寂
出林鶏唱已嘐嘐　風伝梵刹雲流响　水冷鯨音月落郊
万里梯航人乍醒　塵心消尽一間茅

四

江城洞洞不辞勞　入夜譙楼気象豪　里巷無驚安衽席
海邦有頼静波濤　月明風迎鼉声遠　浪黒星移虎帳高
四海昇平無内外　貔貅閒煞擁旌旄

五

迷離千片落岩阿　玉葉無心結一窩　出岫不随蒼狗変
作霖猶待太虚過　寒深化水迷鷗鷺　影寂因風挂蔦蘿
自是氤氳涵万化　鴻濛従此楽融和

六

白鷺帰飛落影遐　珠岩天濶可為家　呼群漫訝来瑤圃
逐水猶疑墜白華　未許鷗盟相狎乱　応知矢繳不能加
翺翔豈少栖遅意　看破征鴻在水涯

七

東湖湖水入微茫　万頃澄流印月光　明鏡已従波裏啓
驪珠誰探海中忙　微風幾許揺蟾魄　冷露無由湿桂香
浪静波恬留永夜　水天一色共飛揚

八

万里汪洋浪不生　烟消遠浦海天晴　蜃楼倒影波濤見
雲樹澄空日月明　浩浩微紋如織錦　悠悠緑碧似流晶
石尤且莫猖狂甚　快覩滄浪好濯纓

九

寂寂村居一小亭　春明鹿峙百花馨　閒携竹杖尋芝草
倦臥松陰得茯苓　日暖陽和雲出岫　水流寒碧月来庭
不聞車馬稀冠蓋　鶴唳猿啼絶可聽

十

碧溪蘆畔閃漁燈　知是漁人多結罾（曾）　好月満湖聞弄笛
細烟沽酒但招朋　臨淵有夢思鱸膾　挙網無栄免愛憎
世事不聞簑笠外　厳陵之後有誰能

交州　阮儀　竜湫

一

千尋突兀峙江天　倒圧狂瀾不敢前。　裁断鯨波帰大海
撼余風勢擁長川　寒潮已奠中流柱　映月光浮半壁商
烟客往来称楽土　梯航多集在春前。

二

峭壁蒼蒼草木饒　如屏一面控層霄　雲含山雨囲青障
風湧松濤漲碧潮　千古烟霞無徒態　壱壺図画有余嬌
潺潺水瀉南溟外　鸞鶴帰時不待招

三

壱声鶴唳出西郊　梵宇鐘声列暁敲　催落冰輪天欲啟
喚回塵夢物初交　乾坤壱気開群動　竜象三千出短茅
百八洪音猶嫋嫋　野雲飛去桂松梢

四

城築屏山万里濤　逢逢飛出戍楼豪　声流碧水銅竜咽
响応層雲海月高　令粛巳聞鶏易唱　化行不使鶴猶号
四方久矣無辺警　多事漁陽壱夜労

五

凌霄壱気鬱嵯峨　呼吸虚能養太和　爛燦金枝蔵石澗
氤氳玉葉布岩阿　閒来入夢陽台幻　嬾去従竜碧溪過
漫道無心頻出岫　九天霖雨待如何

六

虚巌掩蕩夕陽遮　天外飛回白鷺斜　絲頂壱行梳石髪
霜翎千片乱蘆花　帰山有跡盟鷗渚　掠水無心伴鶴家
不入虞羅栖隠処　忘機随意立晴沙

七

湖枕屏山水壱方　冰輪倒影漾寒光　驪竜入夕合珠臥
洛女明粧啟鏡光　滌去烟塵帰映潔　涵来蟾窟見蒼凉
天辺玉兎年年在　疑是江頭夜搗霜

八

遙望源頭水気平　流来南浦不勝情　桃花徹底虚無色
蜃気成楼静有声　月落夜深移上下　竜帰天闊入空明
浴浪銷尽風雷勢　易洗天河万象清

九

岹嶢鹿峙挹南溟　鶏犬人家接水汀　野老耕耘無税地
児童夜読有園経　管絃不断流清澗　図画相連積翠屏
掩藹紅霞横落照　疎林茅屋有余馨

十

壱葉凌風穏未能　鱸溪帰泊碧雲層　牽来鷗鷺今朝夢
挂画波濤昨夜曾　晩看炊烟全入港　酔眠江月不須燈
桃源若得漁郎入　忘却人間有廃興

維揚　周景揚　愈謙

一

金星化作碧峰円　静鎮南溟鎖巨川　草木曾容鷗鷺托
波濤不許鱷鯨眠　風廻月竇長宜夜　水濺雲根半倚天
従此往来応利渉　錦帆時趁到河仙

二

芙蓉羅列万山朝　独展雲屏控碧霄　黛抹遠合晴日谷
嵐深閉鎖白雲橋　烟霞毓秀松楸老　雨露鐘霊草木嬌
為愛層層蒼翠並　平分峭壁四天遙

三

驚起神鯨宝殿敲　風雲変動万縁交　天辺玉兎将帰洞
海底金烏漸出巣　石室松窗僧夢覚　棚城茅店客愁抛
悠悠百八洪音静　已啟乾坤太極包

四

江城露冷鼓声高　将令軍威気象豪　万里長天揺斗宿
千尋大海動波濤　金鎗夢醒黄竜艦　鉄甲腰軽白虎韜
不用雷門将夜警　九州従此解征袍

五

霊心空洞更嵯峨　黛色重重変幻過　玉葉横天呑不尽
金枝覆地吸応多　従竜致雨潜煙嶼　伴鶴還山隠澗阿
欲向蓬萊誇五色　成文煥錦待如何

六

空闊珠巌鎖暮霞　春鉏遠借作山家　雲間佈陣梅飄蕚
石上排群雪散花　万点霜翎粧玉嶠　壱行絲頂立銀沙

蘆汀蓼岸帰棲晩　無意求魚夢已賒

七

山廻海拱別鄱陽　霽夜涵虚浸月涼　浪静団円開鑑影
風微斂艶漾瑤光　三秋幻走金蟆窟　一水平分玉兎郷
練静誰移蘭桂棹　嫦娥相対独悠揚

八

涵天素練繞棚城　誰賦滄浪笑濯纓　臥海金鰲堪数甲
趨風玉馬絶無声　秋深斗宿垂光冷　日暮峰巒倒影明
五百年来名世出　黄河応比更澄清

九

雄窺海鑑枕山屏　村舎参差得地霊　香稲光揺臨綺陌
新花紅亜綴茅亭　春寒牧笛吹牛背　日落漁歌出鷺汀
理乱不聞安素業　蒔瓜(瓜)終日向巖坰

十

万里煙銷水気澄　沿堤如結鷺鷗盟　磯頭月朗懸簑笠
谷口雲深理釣繩　得酒但求千日酔　放歌長是数家燈
風光廻与瀟湘別　不逐桃花入武陵

交州　陳禎　天霽

一

壱巻石鎮自河仙　向背強潮不敢連　已遇東溟鯤鱷勢
又駆南海蜃蛟涎　当流虎踞千秋鑑　入夜鯨呑万象天
廼与朝宗諸島別　応知砥柱奠山川

二

峰巒羅列向西朝　恰似屏風対綺寮　月映蒼苔添黛色
霞侵緑障化虹橋　鍾霊久許松杉老　蓋世偏承而露饒
従此煙嵐開壱面　層層瑞靄出青霄

三

西来宝刹枕南郊　五夜金鐘徹耳敲　響教層霄驚宿鳥
声催叠浪起潛蛟　三千世界迷途醒　百二山河曙色交
触動離人多少事　夜来郷夢已全抛

四

城環江口水為濠　部伍森厳掌夜警　令起雷門嗔虎豹
威揚風伯払旌旄　戍楼月照雕弓静　渤海鼉驚玉浪高
蕩尽煙氛天欲曙　露華初綴湿征袍

五

凌霄石海洞雲過　壱壱含来養太和　翻訝白衣来古澗

還疑蒼狗落深窩　九天錦繡包容尽　四海文章蓄積多
指日春雷空谷応　従竜行雨更如何

六

突兀(屹)霊巌抱緑沙　壱群羽客半天斜　廻峰片片霜初白
遶樹層層玉已加　林下樵夫疑降雪　酒中韻士欲吟花
依稀万仞昂霄上　鶴髪仙人駕彩霞

七

如洸蒼窮入夜涼　東湖湛湛接天長　臨流素女開眼鏡
失手金環落水郷　鮫室已栽丹桂樹　晶宮又貯白霓裳
徘徊上下澄如練　醉倚吟舟更渺茫

八

平鋪白練向南溟　澄徹冰心吸太清　魚自泳遊潛錦浪
鵬因飛撃動雲程　春晴明媚求珠蚌　夜静光涵見水晶
応識越裳頻入貢　中華天子更廉明

九

鹿峙高低属地霊　参差村舎隠雲屏　門前獣踞青山勢
墻下鴉驚老樹形　暮返漁樵如画景　朝駆犀象雲郊坰
人人鼓腹東皐外　翹首中華戾帝星

十

鱸溪蘆岸緑層層　羅列漁舟思不勝　老嫗頻呼魚換米
痴童笑指月為燈　眼目湖海真家室　掌上経綸当股肱
欲問富春何処是　団円魚水憶巌陵

呉陽　陳瑞鳳

一

巍巍孤島斗牛辺　砥柱中流不記年　巨浪遠当山有勢
狂瀾高圧水無権　古今毎見風雲変　朝夕常教日月懸
想是蒼穹(窮)偏著意　培成奇勝鎖南天

二

葱蔚如屏接碧霄　城環壱面海光朝　雲生蒼翠層巒抱
両洗丹青絶壁遙　入檻淡濃開黛色　倚空楼閣展鮫綃
招群共拠胡床対　晩助詩情思更饒

三

野寺煙迷曙色交　疎鐘次第出松梢　三星撞落僧眠覚
半月敲残鶴夢抛　風送寒声清世界　天流余韻繞江郊
徘徊欲悟波羅蜜　半偈持来好清茅

四

投筆干城将気豪　五更壱鼓鎮江皐　披星乍響魚驚躍
帯月頻催鶴夢労　近聴楼船沾服化　遠聞境宇頼安牢
年来喜見昇平久　扣揖中流枕自高

五

虚霊高聳自嵯峨　朝夕閑雲毎見過　吐納有情迷石竇
氤氳無定繞巌阿　巻舒自見乾坤大　幽邃深蔵気象多
超出紅塵懸海外　英英従古近星河

六

煙鎖珠巌日已斜　排行飛落払流霞　機忘海国惟求侶
雪点鱸溪便作家　明月棲遅魚是夢　清風翔集影留沙
生平不似鷹鸇者　落落超群水石涯

七

万頃煙波夜渺茫　横空碧影月如霜　高低宝鏡雙懸影
上下霓裳壱様妝　桂樹有心流不去　冰魂無迹影偏長
蛇竜錯認呑難去　吐出還天水共光

八

渺茫秋水最晶瑩　虚湛波光徹底清　玳瑁乗潮花色現
珊瑚帰網樹枝明　軽鷗夢落潮常静　別島帆帰浪自平
莫訝海隅無勝槩　誰遊南浦不含情

九

海辺島嶼地鍾(鐘)霊　草木参差帯郭青　離落緑生雲裏屋
蕉花紅覆夢辺亭　泉鳴大海声侵榻　鶴宿幽林影在庭
隔巌晩吹牛背笛　樵歌互唱也堪聴

十

滄浪壱曲水澄澄　緑映閑鷗認武陵　月桂半竿還対酒
星懸両岸乱疎星　蘆花掩映煙留夢　椰樹光寒露湿曙
風景松江那得似　徘徊郷思愈頻増

同安　陳自蘭　懐遠

一

抜地孤標倚碧漣　中流終古鎮河仙　劈開巨浪余千里
払去風塵別壱天　大海無声流積雪　空山斜影蘸平川
雙懸日月無垠隔　砥柱狂瀾独有権

二

渺渺雲根列綺寮　美人眉黛鎖春嬌　屏因積翠成高曠
物為題名不寂寥　帯雨臨軒青似洗　飛姻排闥色添饒
此中並入中華地　鑿石分光有霍姚

三

淅瀝余寒圧樹梢　醒来愁煞野僧敲　漸侵大海鯨初起
散入深林鳥不巣　羈客毎驚身是寄　佳人長恨夢初抛
上方打破関頭路　悟得乾元第壱爻

四

遙看海畔尋星高　又是干城気象豪　静夜声灌雷中耳
壱天寒処雪堆濤　已無辺警同疆界　尚有雄風擁節旄
化外久知消伏莽　九州人尽解征袍

五

玉葉魚鱗較若何　孤高又得恋巌阿　白駒過隙来還去
蒼狗看人少亦多　吐納有情開混沌　吹嘘無力塞天河
祗知世掌文章美　壱氣氤氳協太和

六

遶樹低飛壱陣斜　半窺滄海即為家　珠巌無恙蒹葭近
碧落寧辞雨露賒　自惜秋翎梳暮雪　翻来絲頂立銀沙
雲霄有路帰将晩　霜鬢蕭蕭水壱涯

七

平分秋色入滄浪　万頃金波壱渺茫　素女臨風揺玉佩
湘妃対鏡浣明粧　依依水殿懸雙魄　宛宛伊人在壱方
欲写冰心猶未了　桂花香浸露華涼

八

未至源頭看水清　預知有書必澄明　悠悠雲月晴空果
泛泛江山四望平　冰鑑光浮曽見底　玉壺流満総無声
紅塵不到波心静　思入滄浪無限情

九

避世幽居草壱亭　壱湾溪水壱煙屏　時人嘲笑耽詩酒
累我癡愚半酔醒　映竹遍遮招物議　入雲全愛採芝苓
抱琴時弄亀山操　出谷余音不忍聴

十

笑指生涯壱破瞬　利名俏尽満篷冰　売魚嬾欲趨城市
沽酒閑来得友朋　挙網誰先争水沢　和歌声許出蘆燈
悠悠月浸桃花浪　流向灘頭緑幾層

銀同　陳躍淵

一

金星帯礪鎮河仙　万里波濤頼仔肩　水口容舟流不溢
海門深鎖閉能堅　横空巻石疑無助　砥柱中流却有権

截去狂瀾分両勢　任従禹鑿不能遷

二

青山疊疊望如描　翠展棚城去不遙　遠接河江連島嶼
近環台郭聳雲霄　峰巒擁抱千層秀　樹木籠葱万古饒
地軸天然図画裏　非関憑眺献蒭蕘

三

月影斜明落四郊　蕭疎古寺忽頻敲　驚回旅夢千愁破
喚醒禅心万慮抛　百八清音喧曙色　三千淨界散林坳
鶏声叫罷金声響　知是山僧起草茅

四

細柳営中久已牢　譙楼何事響嘈嘈　不因踴躍三更設
正為防閑五夜労　滴滴催来江上月　逢逢驚起海中濤
棚城守望厳周密　按轡巡行羨略韜（鞜）

五

海国山開景若何　氤氳瑞気蓄巌阿　収蔵片片増華彩
吐納悠悠蘊太和　谷幽久聞霊石点　峰召更唱采芝歌
若非洞口蓬萊近　那得飛来五色多

六

疊石清幽帯素霞　珠巌宛作鷺鷥家　参差樹上栖身白
断続林辺鼓翅斜　会擬群鷗臨碧水　又憐秋雁落平沙
求魚暫托江湖外　欲向南溟路已遐

七

竜帰淵静碧茫茫　知是東湖月影涼　水隠明珠遊玉兎
天沉宝鏡洗霓裳　高低淨映雙分色　上下虚涵一様光
欲挹彩華無定処　却忘身入広寒郷

八

波流上下両分明　南浦風恬浪不驚　静影無痕千頃白
横空有色壱泓清　行雲錦綉迷銀海　月到冰壺徹水晶
互答魚舟還泛泛　沙鷗翅集也忘情

九

緑展蕉林接野坰　廻環鹿峙映茅亭　門垂茂樹蔵鸚鵡
路傍幽巌啓戸庭　犀象静中無瑣擾　竹籬疎処亦安寧
山家風景休嫌寂　大婦流黄夜不停

十

壱曲清溪勝武陵　求魚何必四鰓称　蘆花有月蘆花釣
緑水無風緑（永緑）水層　霧罩淵中朝設網　星輝岸上夜懸燈

沢梁無禁漁人楽　晩唱帰来思不勝

明香　陳鳴夏　天聞

一

卓起高峰障碧天　当流抵却浪花連　長封海国成巍鎮
横截強潮鎖巨川　帰去漁歌閑水月　往来人頌静江烟
風雲変幻彰彰在　万古安瀾勢屹然

二

聯絡屏山万叠明(?)　誰将黛緑抹層霄　彩霞点染鮫綃現
紅日斜鋪錦繡饒　映地不凋秋後葉　晴峰恰似画中描
応知海外昭形勝　偏入詩情矚望遙

三

何処寒鐘遥枕坳　静知蕭寺帯雲敲　子規啼罷山含月
蝴蝶夢回鳥出巣　機事喚醒車馬客　晨占看破坎離爻
声声飛落鶏鳴後　尽把塵縁静裏抛

四

淵淵鼉鼓振江皐　辺地軍威守令豪　海島漏長無警夜
雷門風定静生濤　響伝清漢星芒動　声徹南溟雪浪高
白首漁翁閑釣月　柳営不管掛征袍

五

抱潔終能恋澗阿　蓬萊五色較如何　長天呼吸帰霊竅
一気氤氲養太和　未出峰頭還蘊藉　暫蔵洞腹自婆娑
待看指日騰空谷　会向帰霖沛沢過

六

差池白鷺落朝霞　群立岩辺訝雪花　意懶求魚閑在藻
心期同鶴啄晴沙　霜翎自許高秋雁　絲頂猶能笑暮鴉
欲問帰飛何処是　九衢雲路在天涯

七

懸空冰鑑浸湖光　湖底雲間両渺茫　玉兎秋高遊碧漢
金蟾夜静冷滄浪　海天映潔交雙鏡　水月多情共一郷
幾度清輝文物外　依稀桂子落花香

八

波澄南浦尽清冷　玉宇無風浪更平　遠接秋空浮霽色
長鋪素練絶潮声　青楓倒映江心樹　嬾柳低聯水面情
夜静蚌珠明見底　却疑深貯月華晶

九

柳色春深草花青　独将鹿峙結幽亭　半窗梅月新詩料

一榻松風睡酒醒　黜陟怎知塵世事　防閑聊閉白雲扃
五陵車馬空流水　早向南軒閲海輕

十

秋溪如練碧澄澄　薄暮漁舟泊岸騰　浪迹江湖聊自適
癡情世路幾人称　潮辺共話寒燈下　酒後和詞緑水層
風月鱸湾無我禁　何労更欲問厳陵

五羊　陳演泗　雲沢

一

岹嶢金嶼莫漪漣　雄踞中流鎖百川　遠截狂瀾分海勢
静当巨浪一星円　凌霜鴻雁供棲止　戯水魚竜任往還
堪羨鍾霊多壮麗　高擎日月照南天

二

峰巒聳翠接層霄　黛色如屏景気饒　樹接遠天霞綺散
嵐侵紅樹夕陽嬌　入林巧鳥調璜管　上閣松風捲暮潮
堪羨河仙居海外　鍾霊不負万山朝

三

蒼凉落月掛松梢　宝刹疎鐘次第敲　柏子烟消僧出定
珠林風静鶴辞巣　雲開曙色光清漢　風送天花遍緑郊
悟得菩提無著処　声中誰結一間茅

四

蓼蓼画鼓振江皐　粛粛霜威寺気豪　万籟烟開潮半落
六街人静月初高　仁流異域門虚設　徳洽殊方多不搔
独向譙楼瞻大樹　不憂驚夢鶴猶号

五

石洞虚霊瑞気多　彤雲耿耿紬岩阿　懶将華彩為霖雨
蘊得文章養太和　影入蓬莱同燦爛　光涵玉葉共婆娑
巫山自有高唐夢　羞向襄王夢裏過

六

倦翮飛回漸作家　翩翩絲頂掠明霞　蒹葭落影無冰雪
汀渚呼群乱月華　低宿祗知尋静境　高棲寧必在晴沙
忘機日与漁翁狎　不向疎林共晩鴉

七

晶瑩月色映湖光　上下重輪入渺茫　万頃鮫宮開玉鏡
一囲海国舞霓裳　彩雲影到波心静　素練寒生水面長
坐久不知香満袖　桂華疑在水雲郷

八

雲帰南浦晩潮生　蕩漾烟波接太清　貢艦挂風随往復
漁舟披笠任縦横　虚涵万象冰壺冷　静浸秋光玉鑑平
最喜滄浪謌古調　悠悠誰与濯塵纓

九

数椽茅屋列郊坰　半接烟村半接汀　漁父忘機閑釣月
農人食力暁披星　雲封古道樵謌歇　露湿幽叢牧留停
取次登臨無限興　薫風翕翕水清清

十

遠望鱸溪恍武陵　蒹葭深処露漁燈　蓬依碧水能随月
樹接銀灘易挂罾（曾）　售去細鱗先換米　沽来村酒独邀朋
安危不入烟波夢　一任魚竜変化興

交州　鄧明本　天機

一

独立巍巍壮碧淵　一星飛出鎖長川　洪濤拍岸高能截
白馬横波勢不前　樹色暗浮諸島月　貢帆寒渡隔江烟
中流砥柱真形勝　万派朝宗次第連

二

抱郭屏山路不遙　暗描黛色浮塵囂　烟開翡翠巣春幕
霞映虹霓駕晩橋　一島地霊環緑水　千重雲気接青霄
峰巒挺秀帰雄鎮　海外栄名万古標

三

化城霜冷蒲牢動　一一声催俗処抛　响徹林端驚宿鳥
韻流海上起潛蛟　家家漸発菩提願　処処初開混沌包
百八鯨音安息後　山河繚繞曙光交

四

令粛江城戍鼓労　逢逢暗逐夜風号　寒驚水国黿鼉起
響応明河列宿高　月桂雕弓閑虎帳　霜横画戟擁竜韜（鞜）
化行海外妖氛息　確出陽光解戦袍

五

清光如練繞旋螺　静吸氤氲養太和　五色文章蔵石竅
千重錦繡蓄深窩　空教伴鶴青山隠　未許従竜碧漢過
飛去為霖原有望　春雷響処待如何

六

九霄高挙路猶遐　繒（曾）繳都忘世外加　立向青蕪堆白雪
栖臨珠樹発瓊花　蘆洲宿鴈寒非侶　蓼渚閑鷗跡共賒
頓覚孤高能戢羽　潔身長許伴烟霞

七

潮満東湖夜色涼　一輪皓月印滄浪　涵虚穆穆金波影
徹底澄澄桂樹光　風静鰲(鱙)争天上下　露寒蟾占水中央
遊人酔後休撈去　万頃浮沉在渺茫

八

万頃蒼茫碧練営　風来偏訝動雲程　魚竜活潑空中見
斗宿徘徊水底生　沢国客謌離別後　梯航帆入画図明
黄河兆応清如許　翹首中華頌太平

九

鹿峙村居枕巨溟　桑麻鶏犬四時青　蚕娘提筥謌南陌
漁父持竿釣乱星　樹石能催壺裏興　風波省却夢中形
莫言山野無佳趣　笛弄残陽隔水听

十

夕陽鱸溪緑澄澄　漁舟一一樹懸罾(曾)　扣絃笑対敲針子
買酒歓招釣月明　箬笠著余孤島夢　蘆烟寒逗破蓬燈
無営久計同鷗鷺　勝逐桃花入武陵

明香　孫天珍　錫玉

一

迴出蓬萊別一天　中流突屹鎖雲烟　狂濤不使遺滄海
濁浪長教浄碧川　波静貢帆千里遠　水清山月半輪懸
日南形勝無雙境　帯礪河山亦有権

二

如臣面面拱南朝　万仞風光物色饒　淑気氤氳連海岱
晴嵐迢遞接雲霄　天張図画烟霞繞　地毓精霊草木嬌
不老亭亭千古在　長帰屏藩不知遙

三

蕭然古刹向西郊　百八洪音五夜敲　声到客船郷夢覚
響沉花雨俗情抛　懸空残月雲帰洞　繞樹疎星鶴出巣
傾枕頻聞天欲曙　挙頭紅日挂松梢

四

棚城一面繞江皐　夜鼓鼕鼕応海濤　響徹深山驚宿鳥
声過幽谷起潛鰲　清平有兆閑師旅　安静無虞冷甲刀
設険全憑更漏転　不愁四境鶴頻号

五

英英飛落自成窩　石洞長留淑気多　出岫未含霊雨去
従竜猶待太虚過　収蔵五色帰霊竅　変幻三昧湿鷺簑

久蓄精華帰好夢　巫峰高処又為何（何為）

六

江湖落尽落晴霞　托足珠巖即是家　翩翩羽衣飄玉樹
行行絲頂印平沙　九皐旧侶情多厭　六翮新鴻影更遐
但得栖遅閒羽翼　無窮幽思在蒹葭

七

目極中霄入渺茫　一泌斂艶恍瀟湘　倒浮玉鏡明如画
白浸冰壺冷若霜　蕩漾金波風颯颯　飄揺碧練水泱泱
莫非久厭蟾宮裏　却向東湖洗旧粧

八

一派長流分外清　中分南浦夾沙平　秋波斂艶連天碧
夜月旋廻徹底明　釣罷漁舟帰晩唱　驚寒雁陣断秋（過）声
鯨鯢逐隊頻翻躍　水漾珠璣万里晴

九

鹿峙巍巍一色青　村居錯落幾茅亭　人駆犀象尋蕉夢
夜罷農桑閲水経　家釀園蔬過歳月　蒼松翠竹繞門庭
四時不断花還鳥　無限風光悦性霊

十

鱸溪浩浩水澄澄　景色依稀恍武陵　釣罷閒帰魚換米
醉余高臥月為燈　鶴汀島渚踪何定　楚水呉山興未剰
名利不関超分外　生涯惟楽一漁（曾）罾

鷺江　孫天瑞　錫祥

一

六鰲駕就一山円　領略中流控百川　圧倒狂濤成砥柱
劈開駭浪著神鞭　星懸半壁分椰島　虎踞千尋鎮海天
万里晴和昭郡国　観瀾誰更挾飛仙

二

晴開如画衆山朝　一面峰巒聳紫霄　緑醸嵐烟蔵石髓
藍堆林靄駕虹橋　松濤風度青堪滴　柳眼春帰翠尽嬌
万古蒼茫元気鬱　屏藩長控九天遙

三

鯨音百八帯雲敲　四野熹微曙気交　入海声高鷗失夢
出林霜冷鶴辞巣　関河近聴諸天粛　客路遙聞万慮抛
隠隠清虚無覓処　梵王深院尚雲包

四

江城独倚海雲高　撾尽漁陽韻太豪　四塞星孤閒沢国

一声浪起振波濤　威厳豈外防秋意　寧謐(謐)能忘入夜労
幾度雷鳴霜気粛　鉄衣難換錦宮袍

五

翠嬌霊虚足太和　餐雲消受壱生過　鯨呑片片猶嫌少
蚕食層層不記多　佈陣有心帰石竇　為霖無意恋崇阿
九天靉靆憑呼吸　煥出文章得幾何

六

珠巌掩藹入烟霞　群鷺帰飛認故家　未雨全山飄玉粒
梳翎満岸落霜花　頂絲歴乱翻紅葉　襟雲聯翩点白沙
珍重林塘増価好　九宵帰去夢魂賒

七

淡蕩湖光斂夕陽　倒懸明月気初涼　晴空水国雙磨鏡
冷浸蟾宮一片霜　烏鵲半沈河漢影　桂華全照水雲郷
細看上下涵虚尽　清絶無須費激揚

八

惜別能無去住情　隔流最称滌塵纓　九天鑑物雲留影
六水澄源浪絶声　泛泛魚竜波面碧　悠悠鵞杜鏡中明
侵晨独掌絲綸客　錯認玻璃百尺清

九

粛蔬鹿峙敞雲屏　結構幽居養性霊　植福紫芝留薬圃
能言翡鳥入図経　園蔬秋嫩霜連夜　野犢春肥草満汀
寵辱不驚無税地　更誰捜索到林坰

十

鱸溪西畔水清澄　沽酒江頭話釣朋　笠補前川黄箬葉
舟維夾岸緑蘿繩　片罾無恙春如海　半月虚明夜作燈
為問漢朝微相事　幾回車馬訪厳陵

交州　莫朝旦　成弼

一

金星屹立水中天　大海飄揺浪不連　潮衣鯨鯢能遠徙
林梢野鶴欲聯翩　当流巨石横江渚　砥柱飛峰截沸川
来往咏歌相継続　清風明月錦帆懸

二

層巒壱壱出重霄　孔雀屏開五色嬌　雲樹蒼茫花綴錦(綿)
人烟錯落水通橋　嵐光抱郭長流翠　藩翰擎天万仞朝
添得倚欄如画裏　生綃千尺倩誰描

三

霜風吹徹暁鐘敲　蕭寺洪音点点抛　撞破迷途帰妙覚
喚回若海起潛蛟　談経百八星初落　醒世三千夢不清
仏法無辺伝世界　蒲団坐冷鳥離巣

四

逢逢一百振江皐　响徹南溟将令豪　化外防閑無夜警
城頭驚夢応寒濤　風伝海国星初動　露下譙楼月正高
漏滴五更還点点　太平銷尽旧弓刀

五

巍巍石洞関岩阿　呼吸祥雲変態多　有路連天呈靉靆
無根著地自婆娑　春回日朗漫天闊　影待竜帰作雨過
我欲攀藤尋去住　重重飛出島烟蘿

六

雲岩万仞鳥為家　遠看飛来雪有花　雲銷霜毛依玉樹
風飄絲頂倚蒹葭　亭亭班立蘆溪岸　戛戛長鳴碧水涯
帰路茫茫烟水闊　閑情長許弄晴霞

七

江天月色印影光　万頃空明水一方　恍若広寒帰沢国
宛然蟾窟落滄浪　竜潛波衣珠能静　竈宿淵中桂亦香
我欲乗槎週八極　四囲烟景総蒼凉

八

海不揚波出聖明　於今南浦果澄清　虹銷雨霽秋光満
雲斂烟霞碧漢平　江上清風沙若岸　舟中明月水如晶
持竿独釣溪頭客　長詠滄浪可濯纓

九

鹿峙深居得地霊　峰迴路転翠為屏　人烟錯落囲天緑
雲樹蒼茫入戸青　風起潮声山谷応　月斜簾影野花馨
野人荷鍤(插)披星出　耕鑿渾忘日不停

十

樹下掀天浪不興　鱸溪波色水如冰　扣舷得月歌新曲
沽酒留燈話旧朋　鷗鷺且盟蓬底夢　風波難入蓼辺曽
細鱗巨口鱸帰網　翻笑松江浪得称

鷺江　孫季茂　二斯

一

屹立分明勢欲連　金星光処奠河仙　高擎砥柱明山月
遠截狂瀾静海煙　根接嵩華鍾(鐘)沢国　勢開屏翰障晴川
清標不与群峰偶　独倚中流別有天

二

天然形勝画図描　羅列如屏紫翠饒　石染青苔顔不老
樹知南懊葉無凋　閑教花鳥粧幽谷　時借烟霞仰碧霄
自是翁(?)葱誰比美　千秋維翰拱熙朝

三

悠揚百八繞荒郊　想是寒山睡足敲　飛落鯨音醒蝶夢
喚回群動啟蒙包　金鳥出海神猶粛　柏子参禅物未交
撞徹三千帰上界　枝頭鴉鵲自嘐嘐

四

傍水棚城一面高　淵淵夜皷壮竜韜　声喧河漢催明月
響応黿鼉振碧濤　大地未春雷早発　中宵無颶海先嘈
霜夜不寝江辺戍(戍)　設警人瞻将気豪

五

三春呼吸総成窩　触石飛廻一気多　半暁精華為雨露
尽蔵錦(繡)綉壮岩阿　従竜有意帰滄海　化水無心挂緑蘿
暫借洞門聊托足　虚霊還待奮雷過

六

一行斜共下晴沙　認得珠巌便作家　絲頂立来班有序
雪翎飛処玉無瑕　乍臨江畔窺魚藻　再向枝頭喙露花
踏遍洲辺殊磊落　閑情還憶旧蒹葭

七

欲艶東湖夜未央　波清月白影××　××××××中色
風静難沉水上光　飛出夜××××　××玉鏡入滄浪
平分高下明如画　好泛蘭橈×××

八

万里無垠一気平　栖鷗宿雁印沙晴　旋流素練帰寒碧
斜映銀河徹底明　雲過毎添波上錦　風来時動水中晶
滔天如鑑昭文物　漫許求魚問濁清

九

山遺鹿蹟石稜稜　結構幽居一草亭　翠竹蒼梧環曲径
紅霞碧霧擁疎欞　鎖韁無預閑身世　耕鑿多方養性霊
蕉夢不知誰早覚　携笻回去踏苔青

十

掩藹鱸溪恍武陵　漁烟流雲水澄澄　網懸柳樹看潮満
棹倚蜃楼望月昇　半挂簑衣眠冷露　盈斟斗酒話良朋
疎狂不学閑如我　也向滄洲続釣繩

跋一

西園飛蓋，冰井浮瓜，南浦流雲，珠簾捲雨，撫山河壯麗，共伝大風之歌，観宮闕嵯峨，群誦柏梁之什，逖矣前徽，尤矜此日，題名山於座右，関塞周智，詠蚕婦于宮中，桑麻在目，若乃古風渾穆，如考周宣之文，麗藻輝煌，儼入陳思之室，寧止金城詠柳，歎壯歳之已非，宋玉賞荷，恨穠華之易謝者哉。

嶺南老人余錫純兼五氏跋

跋二

士翁先生，抱舟揖之才，負湖海之気，丙辰春，予乗槎抵日南，盤桓半載，吟咏終霄，因出河仙十題，相為唱和，細玩大作，有如峻嶺彤雲，澄江新月，具此才情，何難拍裏陽之肩，而攬(攬)嘉州之袂哉。

南海陳智楷淮水氏跋

後記：こゝに再録したのは李氏複刻本による河仙十詠の全部のテキストであるが、上述せる如く李本には少からざる誤植や韻律に合はない個処が存するので、適宜に訂正を加え、原文は括弧に入れて、傍註として残した。別に疑問の存するものは傍に疑問符？を付し、重韻の個処は傍に。を付しておいた。孫季茂の第七首の詩は黎寿春家蔵本で既に蟲蝕によつて一部份欠文となつているので、その個処は××をあて、又鄭天賜の序文は本文にて再現したテキストに従つた。尚考訂に際しては中文大学新亜書院中文系講師梅応運氏の御教示に与つた。こゝに誌して謝意を表したい。

一九六六年十二月二日　新亜研究所東南亜研究室にて。